

2019・2020・2021 年度
都市環境デザイン会議 公募型プロジェクト

〈全国大会 2022 in 琉球〉
プロジェクト発表 梗概

2022年10月28・29日

発行：都市環境デザイン会議

プロジェクト発表プログラム

10月28日（金）：第1日目（前半）		備考
14:30～	開会挨拶（石嶺幹事）、司会（若本理事）	
14:35～ 14:55	発表①（井口 勝文） JUDI公募型プロジェクト2014-2015報告 「歩行者空間による中心市街地の構成」の電子書籍出版	関西ブロック
14:55～ 15:15	発表②（斉藤 浩治） 発酵文化から読み解くまちの姿（その2）	東北ブロック
15:15～ 15:35	発表③（岩沼 実奈美） コロナ禍における中心市街地活性化のための「NO密マップ」作成	前橋工科大学
	休憩（5分）	
15:40～ 16:00	発表④（中濱 悠也） 郊外住民（農家）と市街地住民の交流会の実施～規格外野菜を用いたジューズと土づくりによる資源循環型都市～	前橋工科大学
16:00～ 16:20	発表⑤（中村 伸之） 里山交流拠点・かせやまの森創造センターの整備	関西ブロック
16:20～ 16:40	発表⑥（鈴木 俊治） 農と住が共生したまちづくりに関する具体的アクションの展開	芝浦工業大学
16:40～	講評（金城幹事）	

10月29日（土）：第2日目（後半）		備考
10:40	司会（若本理事）	
10:45～ 11:05	発表⑦（新嘉喜 長健） 那覇まちかどフォトコンテスト（那覇市市制100周年記念提案事業）	琉球ブロック
11:05～ 11:25	発表⑧（須永 淑子） 夜の水彩カフェテラス～水辺空間を舞台とした地域の文化創造実験～	関東ブロック
11:25～ 11:45	発表⑨（稲田 信之） 渋谷円山町三長プロジェクト：旧花街における「都市環境資源としての料亭」の利活用をめぐる課題と展望	関東ブロック
11:45～ 12:05	発表⑩（高谷 時彦） 鶴岡まちなかキネマ再生に向けた市民連携活動（その2）	東北ブロック
12:05～ 12:25	発表⑪（柳田 良造） 半島と島嶼の環境デザインセミナー	中部ブロック
12:25～	後半の講評（天野光一理事）	

注）各発表の持ち時間は、発表13分＋質疑応答5分＝計18分。

JUDI 公募型プロジェクト 2014～2015 報告「歩行者空間による中心市街地の構成」の電子書籍出版

関西ブロック 井口 勝文

1. 目的：pdf 報告書から Amazon 出版へ

2014～2015 公募型プロジェクト「歩行者空間による中心市街地の構成—イタリア・ドイツの事例を参考に、日本の可能性を探る」の成果は、JUDI ホームページのアーカイブ／プロジェクト 2015 に、A4・pdf 36.0 MB で公開している。〈図 1〉

本プロジェクトの成果をより多くの関係者に知って頂きたい、仕事の参考にして頂きたい、との思いで今回 Amazon での出版を思い立った。井上洋司さんなど当時の理事の方々から出版すべきとの励ましを頂いていたことにも後押しされた。

書店に並ぶペーパー印刷の出版を当初は意図したが、ボリュームの問題などで実現に至らず、Amazon の Kindle 版電子書籍出版と、同オンデマンド・ペーパーバックの出版とした。本のタイトルは「歩行者空間」からより広義の「公共空間」に、インタビューの議論を「熱論」とし、合わせて「熱論・公共空間」にタイトルを改めた。〈図 2, 3〉



〈図1〉JUDIホームページでの報告。アーカイブ／プロジェクト2015、A4・384頁・pdf の表紙



〈図2〉Amazon Kindle 版電子書籍の表紙



<図3> Amazon Kindle オンデマンド・ペーパーバック、B5 縦、646 頁。右はその表紙。



2. 編集出版の作業経緯

編集、ペーシングの作業は井口自身が行った。

今回出版の原稿の内容はJUDIホームページpdf版（以下A版）とほぼ同じ内容である。

ただしA版の原稿サイズはA4縦・横書きである。それをKindle電子書籍（以下B版）ではA4横・縦書きに、オンデマンド・ペーパーバック（以下C版）ではB5縦・縦書きに組み替える必要があった。この作業に最も多くの時間を要した。

出版代行をAmazon Kindle電子書籍出版社パプフルに外注した。

B版の販売単価990円、C版の販売単価4,840円。C版が高価になったのは200頁を越えるカラーページが在ることによる。印税は1部辺りB版63円、C版48円である。尚印税収入は全てJUDI事務局に寄付することを、本プロジェクトの主催者と8人のインタビューに同意して頂いている。

3. 出版の意義と出版の成果

8人のインタビューと交わした熱論を出版によってより広く知らしめ、記録として残すことが本プロジェクトの目的であった。その目的は達成

した。2022年9月末までの販売部数は、B版97部(印税の部数換算)、C版29部である。

JUDI会員とその他の関係者の方々が本書に目を通し、考察し、批判的に本書の主張を確認して頂くことを期待する。そのことが本プロジェクトの最終的な成果である。

交わされた熱論を要約して以下に記す。

■1970～'80年代に始まった我が国の草創期の「歩行者空間整備」とは何だったのか。3人の当事者に聞き議論した。

鳴海邦碩「旭川買物公園と都市の自由空間」<図4>

高橋志保彦「横浜・馬車道に始まった、歩行者空間デザインの極意」<図5>

梅本正紀「歩行者モールが結ぶ福岡＝博多の心意気」<図6>

議論を通じて明らかになったのは、①わが国で歩行者空間を街中に広げたこと、②歩行者空間をデザインの視点で整備した先駆的的事业であったこと、③歩車道の段差や安全柵を無くすなど歩行者優先の道路構造を提案し実現したこと、④歩行者優先の街路事業であり、ヨーロッパのような街の構造を変える面的な事業には至らなかったこと。



＜図4＞旭川買物公園。1969年8月 買物公園の実験。一晩のうちに平和通りから車が締め出されて、家族で賑わう買物公園が実現した。



＜図5＞横浜市馬車道。日本で最初の既存道路のプロムナード化が実現した。



＜図6＞福岡都心軸モール。駐車場の出入り口も簡単な車止め石を入っただけで、出来るだけ歩車道を区分せずオープンな空間にしている。

■2000年代に行きついた我が国の「歩行者空間」とは何か。2人の当事者に聞き議論した。

栗原 裕「越谷駅東口『駅前交通広場』は、ここが新しい中心市街地です」＜図7＞

南條洋雄「横須賀、狭山市に見る、日本ならではの出来の歩行者空間」＜図8＞

議論を通じて明らかになったのは、①歩行者空間を一定のエリアで実現する事業が進んでいること、②歩行者空間と自動車の空間を明確に区分する道路構造が定着していること、③市民の自己責任意識の希薄さへの対応が都市デザインの大きな課題であること、④駅前広場が既存商店街に代わるまちの新しい中心地になりつつあること。



＜図7＞ 越谷駅東口第1種市街地再開発事業 西側第1街区棟から見降ろす駅前広場。



＜図8＞狭山市スカイテラスはUR 施行の第1種市街地再開発事業で実現した、駅前とその周辺の歩行者空間整備。

■ヨーロッパの公共空間(オープンスペース)と日本のそれとには大きな隔たりがある。その違いはさらに拡がる傾向にある。2人の当事者に聞き議論した。

中野恒明「職住近接のコンパクトシティに、今こそ本気で取り組もう」〈図9〉

服部圭朗「『金儲け』で考えると楽しい街は出来ません。ヨーロッパは『人』です」〈図10〉

議論を通じて明らかになったのは、①日本の歩行者空間整備は、先行するヨーロッパ、アメリカに多くを学び、日本流に実現してきたこと、②ヨーロッパの街にはオープンカフェの展開など、まだまだ学ぶべきことが多いこと、③道路空間の活用を妨げる道路交通法の壁は厚いが、諦めてはならないこと、④町にコミットすることが重要であること、④中心市街地の再生にはコンパクトシティと職住近接が欠かせないこと。



〈図9〉新宿モア街のオープンカフェ。



〈図10〉東京白金高輪の商店街の空き店舗でカフェをやらせてもらう。そうすることで直接町にコミットすることを学ぶ。

■公共空間(オープンスペース)の手本はかつてはヨーロッパだった。今でもそうだ。そのヨーロッパの都市は'70年代にポストモダンに方向を変えていた。しかし日本は今もモダニズムを抜けていない。日本にもまだ方向転換の可能性はあるのか、都市に関わる実務者を交えて議論した。

養原 敬「世の中は大転換する」〈図11〉

ヒトの進化を実存的な絶望と捉えるより、実存的な希望だと考えて生きていくべきだし、それが可能だと信じない限り、日々の営みができないでしょう。(養原敬)



〈図11〉富山市における第8回インタビュー。

■8回の議論を通じて公共空間に関する3つの課題が明らかになった。

- ・歩車共存の街か、歩車分離の街か
- ・カフェを楽しむ公共空間か、眺めるための庭か
- ・我々はどんなライフスタイルが欲しいのか

■歩行者空間整備は JUDI 創立のきっかけにもなり、多くの JUDI 会員が関わってきた都市計画事業である。本インタビュープロジェクトには関東、北陸、関西、九州ブロックの多数の会員、その他の参加と応援を得た。創立 30 周年に際して JUDI の活動を振り返ることにもなった。

醗酵文化から読み解くまちの姿

～醗酵文化の魅力とまちづくり～

編集総括：東北ブロック 齊藤浩治
(東北ブロック+北陸ブロックの共同事業)

1. プロジェクトの目的

各地の醗酵食品は、その製造に不可欠な要素である塩と適度な湿気、地形と気候風土によって作られている。この成り立ちは地域ごとのまちの成り立ちと密接な関係があると考え、地域ごとの醗酵文化とまちの姿を捉え直し、新たなまちづくりを考える契機とする。

また、社会的にも醗酵が注目される今、地方の酒や食が地域の新たな資源となり、それが地域固有の観光的魅力ともなっている。

今回は、3か年にわたる醗酵文化研究の集大成として、「醗酵のまち上田」でシンポジウムを開催した。なお、このプロジェクトは東北ブロックと北陸ブロックの共同事業である。

2. プロジェクト活動の概要

今期の活動の概要は下記の通りである。

2-1. 醗酵のまち探訪 (その1)

- ・道の駅「醗酵の里・神崎」(千葉県)
- ・活動日：2021年10月18日
- ・道の駅にある全国の醗酵食品を集めた店舗を視察した。

2-2. 醗酵のまち探訪 (その2)

- ・「醗酵のまち・うえだ」(長野県)
- ・活動日：2022年4月23-24日
- ・北国街道の宿場として栄えた上田市にある岡崎酒造や原商店を訪問し、聴き取り調査を行った。また、醗酵文化シンポジウムの会場となる別所温泉の「柏屋別荘」の視察を行った。

2-3. 醗酵文化シンポジウムの開催

- ・会場：上田市別所温泉「柏屋別荘」
- ・活動日：2022年5月28日
- ・上田市で醗酵に携わる活動をしているゲストを招いて、基調講演とパネルディスカッションを開催した。また、その前段として醗酵文化に関する研究成果の発表を行った。(JUDI 会員から2件、長野大学熊谷ゼミ生から2件)

3. シンポジウムを開催した「まちと会場」

3-1. 醗酵のまち・うえだ (長野県上田市)

上田市は、長野県東部にあり東信地方および上田地域の中心都市である。長野県内では長野市、松本市に次ぐ3番目の規模の都市である。

明治から大正時代にかけては全国有数の蚕種(さんしゅ)の生産地となり、全国の蚕糸業を支える「蚕都」として隆盛を極めた。

3-2. 別所温泉と柏屋別荘

【別所温泉】

別所温泉は、信州の鎌倉・塩田平の西側に位置し、古くは「七久里の湯」と呼ばれ枕草子にも登場する信州最古の温泉である。北条氏が別院として使っていたことから「別所」という名前がついたといわれている。

【柏屋別荘】

上田藩の出屋敷として始まった老舗旅館。川端康成をはじめ、数多くの文人墨客に愛され、今なお守り続ける木造4階建ての建築は情緒あふれる趣がある。

現在、旅館業は廃業しているが、管理者である信田社長の思いにより新たな地域活動拠点としての取り組みが進んでいる。



柏屋別荘外観

4. 醱酵文化に関する研究の発表

【午前の部：4件の研究発表】

4-1. 醱酵文化はまちづくりのプラットフォーム
(新たなまちづくりを考える視点)

◇発表者：JUDI 東北 斉藤浩治

(1) 醱酵文化の多様性

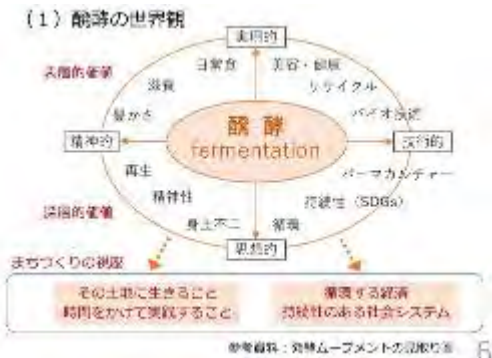
醱酵文化は日本各地に存在する。その特徴を土地と気候で分類すると、流通しない保存食と流通する貿易食に分けられる。

(2) 時間軸で見る食文化

日本の食文化を時間軸で概観すると、2つの転換期がある。一つは明治維新でその後日本は人口拡大の時代となる。ここで伝統的な文化食は、利便性の高い文明食に変わっていく。

(3) 醱酵文化が教えてくれること

醱酵は食品の範疇に留まらず、精神的な豊かさや循環思想につながる世界がある。深層的価値を知ることで、持続可能な社会やその土地に生きる豊かさを教えてくれる。



4-2. 北陸における醱酵文化とまちづくり

◇発表者：JUDI 北陸 埜 正浩

(1) 北陸における醱酵文化

北陸地方には数多くの醱酵食品が存在する。4県の代表的な醱酵食品を紹介した。

(2) 石川県白山市における醱酵文化

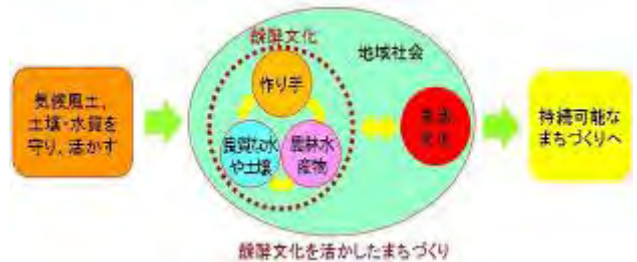
他にはない独自の醱酵食品としてふぐの卵巣の糠漬けがある。始めたのは安政5年(1858)、北前船でふぐが降ろされた頃である。今でも糠漬けには木桶を使用、重しは手取川の自然石と一連のジオパークを象徴するものである。また、鶴来は四大醸造(酒、味噌、醤油、酢)の町として有名である。

(3) 北陸の地酒文化とまちづくり

北陸4県の代表的な酒蔵を取り上げ、それぞれの酒造りの特徴について、歴史、酒米、仕込み水、杜氏の観点から紹介した。

(4) 醱酵文化とまちづくり

地域に根付いた醱酵文化は地域の個性であり、宝である。それを支える気候風土と自然環境を守り、作り手の技術を継承しながら、地域内に循環を生み育て、持続可能なまちづくりへ展開することが求められる。



4-3. 地域観光の「これから」を考える

◇発表者：長野大学・チームうえだ観光5名

◇概要：上田市中心部の柳町を対象として、歴史的な背景を踏まえて今後の賑わい創出を考えるための調査・分析を行った報告である。

(1) 柳町 朝 Cafe

商店街にある駐車場にテントや椅子を並べて実験的に「朝 Cafe」を実施。交通規制などを含めた具体化を住民と共に考える。

(2) 柳町の交通量調査

訪れる観光客の増加により、駐車場利用が場所により偏ることの対策を検討。中心部2箇所現状把握と利用ルートの検討。

(3) 繁忙期における活動

GWの繁忙期に柳町を訪れた自家用車を円滑に交通整理するための調査。周辺駐車場の案内や誘導を実験。アンケートを実施。

(4) 北国街道探訪

北国街道の観光活用を目的に、マップのデジタルデータ化、現地写真によるルートの可視化、専用サイトへの情報掲載を行った。

(5) 日本遺産研究

地域内に存在する「レイライン」について現地調査によって状況を把握し、今の課題と今後の可能性を提案した。

4-4. 小諸市街地における

まちづくりの将来性と課題

◇発表者：長野大学・歴史景観小諸チーム5名

◇概要：小諸市を対象として歴史的景観とリノベーションをテーマに設定し、資源の活用による活性化を検討した報告である。

- (1) みんなで描く10年後の小諸城下町
具体的な17の目標を設定。・城と町の一体的な保存計画・古さを活かしたお洒落な店づくり・歴史文化を伝える施設が充実、等
- (2) 市街地のまちづくりにおける現状
コンパクトシティ政策を推進。・市役所周辺に公共施設を集約・歴史ある建物のリノベーション（揚羽屋、自家製ハム専門店）
- (3) 小諸市街地の課題
 - ・ほんまち町家館の活用
 - ・周遊の交通手段の普及
 - ・空き家の増加
- (4) 課題解決のための提案
 - ① 町家館の「稼げる」仕組の提案
 - ② レンタサイクルを活用したツアーの提供
 - ③ 学生がやるプチ移住体験プラン
 - ④ 空き蔵をカラオケルームに活用

5. 醗酵文化のシンポジウム

【午後の部：基調講演・パネルディスカッション】

5-1. 当主挨拶：柏屋別荘再利用の基本方針

◇講師：柏屋別荘当主 信田直昭氏



◇概要：（冒頭：建物の歴史と建物再生の経緯の説明）2020年に競売で取得した時には建物や施設の傷みがひどかった。補修は費用を抑えながら部分的・段階的に進めてきた。再利用のコンセプトは「昭和の書齋」。大空間と小空間が多様に混在しているメリットを生かしていく。活用例として、20年10月には、長野大学の教授、学生と共に地域活性化・若者ラボの設立シンポジウムを開催した。

5-2. 基調講演

「醗酵文化がつなぐ人・まち・暮らし」

◇講師：酒の原商店5代目女将 原有紀氏

◇これまでの経緯

1905年創業の原商店に嫁いで2002年に代替わりをする。その後、伝統的な味噌づくりに疑問を感じ、抜本的な改革を行って信州イゲタ味噌を確立する。さらに甘酒の開発や醗酵に関わる様々な商品の開発を行ってきた。

◇醗酵に対する思い

様々な活動を通して醗酵への思いが募り、醗酵に対する学びを深めて、2018年に醗酵マイスター及び醗酵プロフェッショナルの資格を取得した。自らの経験と知識を新たな形で社会に伝えるために、女性を対象とした醗酵の女学校を2019年に立ち上げた。

◇醗酵の女学校

原有紀氏が創設し、校長を務める醗酵食品の魅力伝える女性のための学校。女性として健康的な生活を送るための醗酵の知識を身に付ける講座を行っている。講師陣には、杜氏の岡崎美登里氏、味噌ソムリエ市川絢子氏、料理研究家王鷲美穂氏が在籍している。

5-3. パネルディスカッション

「信州上田の醗酵文化を活かしたまちづくり」
パネリスト：岡崎謙一氏、原有紀氏、熊谷圭介氏

JUDI 会員：斉藤浩治、埜 正弘

コーディネータ：天野光一（JUDI 理事）

話題①各自の取り組み紹介

話題②これまで特に苦労したこと

【岡崎謙一氏：岡崎酒造（株） 代表取締役

北国街道柳町まちづくり協議会】



①10年前に酒蔵をひき継いだ頃は経営的には大変だった。酒の本質を追求するために、酒米も地元の物を使おうと考えていた時に棚田米と出会った。最初は酒米ではなく棚田の保全活動だった。今は棚田の酒米オーナー制度が評判になってい

る。お酒は地域をアピールすることに役立つ。今は柳町と一体的に発展して行こうと考えている。

- ②廃業まで考える状況だった蔵を立て直すために、地域の付き合いを大事にし、色んな情報を収集して酒造りに反映した。柳町の中でも青年会などの繋がりをつくりながら、商店対住民の対立解消にも一役買って来た。まちづくりは長期戦だ。

【原 有紀氏：原商店5代目女将
醗酵マイスター、醗酵プロフェッショナル】



- ①当店も地元の大豆を使うことで究極の地産地消を実現した。醗酵に使う酵母菌は蔵付きのものを使っているが、明治から伝わる蔵の大切さを実感している。味噌づくりに使う木桶の甗(こしき)の新調を考え、小豆島の職人に相談したところ兵庫の酒造メーカーで木桶を作ることができた。醗酵に関わる活動が全国的な繋がりを生み、醗酵のまち・上田のPRにもつながっている。
- ②他所から嫁いだ私が地元で溶け込むために心掛けたことは愛嬌だった。(笑) 顔が売れた後に店の隣に「立ち飲み場」を作ったところ近所の評判となり新たな賑わいを作ることができた。原商店が地域のハブとなって地域の活性化を図ってきた。それができる「人の存在」が重要だ。

【熊谷圭介氏：長野大学副学長
環境ツーリズム学部教授】



- ①2017年頃から柳町が観光面で脚光を浴び、交通問題が浮上してきた。その対策を考える場としてゼミ生による研究活動を行ってきた。コロナ禍の影響もあって一時的に縮小したが、早晚回復すれば、学生にとっても今「もてなし」を実践する大事な場所となっている。今回の会場となった柏屋別荘は、今後も人の出会いの場と

なり、新たな取り組みが醗酵される拠点となることに期待する。

- ②大学も学生も中途半端にまちづくりに関わるのは良くない。地域のキーマンとしっかり関係をつくり、受け入れてもらいながら、10年単位で関わるのが大事だ。

【斉藤浩治：JUDI 東北ブロック】

JUDIの醗酵文化研究は2016年に北陸ブロックから始まった。2019年からは東北ブロックが主体的に活動してきた。活動のコンセプトとしては、各地の酒を飲むだけでなく、現地に足を運んで地元の人と語り、地元の空気感を感じることを大事にしている。今回、このような形で良い街、良い人と出会うことができ、良い経験となった。今後、益々醗酵の世界にのめり込んで行きたい。

【埜 正浩：JUDI 北陸ブロック】

日本酒は「国酒」である。自国の国酒を知らなければ、外国の人とも話ができない。日本酒の中でも私はアルコールを添加しない純米酒しか飲まない。酒蔵プロジェクトの中でも地産地消の材料にこだわるテロワールに着目している。

上田の町は駅前の通りに昭和の趣がある。それを大事にすればもっと良くなる。醗酵は地域の個性である。個性があれば地域は必ず活性化される。

◇会場からの質問（長野大学の女性）

自分たちも地域に貢献したいと考えてまちづくりの勉強に励んでいるが、地域の人から学生に望むこと、して欲しいことは何か？

◇回答：岡崎健一氏

涙が出そうなくらい嬉しい(笑)。例えば、住民にまちづくりのアンケートを私たちが行う場合と、学生さんが行う場合では全く反応が違う。朝カフェのような試みでも、学生が実験的にやりたいと言えば反対する人はいない。

【コーディネータ天野さんコメント】

効率化だけを求めれば大手資本に勝てない。酒造りもまちづくりも、人の顔が見える取り組みが重要だ。上田は資源も豊富で人材も豊富だから、今後もきっといい街になると思う。

以上

コロナ禍における中心市街地活性化のための「NO 密マップ」作成

「NO 密マップ」作成チーム 代表 小林瑞稀
 (前橋工科大学大学院工学研究科建築学専攻)
 関西ブロック 杉浦榮
 (前橋工科大学環境デザイン領域 准教授)

1. はじめに

1.1. プロジェクト背景・目的

地方都市の中心市街地は、都市機能の郊外化や大型商業施設の出現、車社会化等により居住人口・事業所数等が減少の一途を辿っている。群馬県前橋市も例外ではなく、市は2017年4月より「中心市街地活性化基本計画」を策定し、まちなみ形成や再開発事業の促進に重点を置き中心市街地の活性化に力を注いできた。

しかし新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、飲食店の時短営業等が余儀なくされ、中心市街地の人通りは減少した。そこで前橋工科大学都市・環境デザイン、ランドスケープ・アーキテクチャ研究室では2020年度より群馬県前橋市中心市街地（以下、中心市街地とする）の活性化と飲食店支援を目的とし、中心市街地の飲食店の営業と利用状況等についての調査を行なった。また、中心市街地の飲食店において商品をテイクアウトし、至近の公園・広場・河川緑地等のオープンスペースで、三密で無い状況で食事・休憩をすることによって、中心市街地の賑わいや回遊性と市民の健全な屋外活動を取り戻す「NO 密活動」という活動を行なった。その活動促進の一環として、テイクアウト・デリバリー可能な飲食店や三密回避可能なオープンスペースの位置が記載された「NO 密マップ」の作成を検討した。同時に人手のない飲食店のデリバリー支援のボランティア活動も行なった。

2021年6月時点で、群馬県には「まん延防止等重点措置」が適用され、飲食店の時短営業等が継続して要請されており、中心市街地を含む前橋市内では感染拡大防止に留意しつつも、活性化の方法論が求められていた。「NO 密マップ」を作成し配布することにより飲食店の集客増加と営業の維持、市民には新たな中心市街地回遊のきっかけや新鮮なまち体験をもたらすことができ、中心市街地の活性化に寄与できると考える。

2021年からは「NO 密マップ」の情報・グラフィックのアップデートと多数配布によって、より社会的な効果を得ることができる実証実験として行なっている。また、前橋市にぎわい商業課等の

市職員有志や、中心市街地の商店の方々の協力とJUDIの助成を得て、産官学連携の取り組みとしてプロジェクトを進めた。

いつ終息を迎えるかわからないコロナ禍において、この試みは前橋市やその中心市街地だけではなく、感染拡大の影響により益々疲労し衰退が懸念される多くの地方都市やその市街地に対し、活性化へのひとつの示唆を得るものと考えられる。また、近代都市の成立過程において、感染症に対する公衆衛生に寄与する都市基盤として設営された都市緑地や都市公園の意義を再認識することにも繋がると思われる。

1.2. プロジェクト内容

中心市街地の飲食店の営業時間・営業内容（テイクアウト・デリバリーの有無、メニュー等）や、飲食・三密を避けることが可能なオープンスペースを掲載した「NO 密マップ」の作成・配布を行う。

1.3. プロジェクトによって得られる効果

飲食店：集客・売り上げの確保、営業の維持・継続

利用者：飲食店を安全に利用し、中心市街地を回遊・体験することができる

前橋市：中心市街地の活性化、市民の健康維持、三密回避の促進

2. プロジェクト方法

2.1. プロジェクト対象地

対象地は、中心市街地とする。（図1）



図1 対象地

2.2. プロジェクト遂行の方法と作業工程

- ① 中心市街地の飲食店に営業時間・営業内容の聴取を行う。(2020年の調査を元に2021年の状況を調査する)
- ② 中心市街地近辺で、三密を避け、飲食が可能なオープンスペースの調査を行う。(2020年の調査を元に2021年の状況を調査する)
- ③ 調査データをもとに「NO密マップ」を作成・印刷する。
- ④ 「NO密マップ」に関するアンケート作成する。
- ⑤ 作成した「NO密マップ」を中心市街地で開催されるイベント時に配布・説明する。同時にアンケート調査を行う。
- ⑥ アンケート結果をまとめ、考察し、「NO密マップ」をリニューアルし、印刷する。
- ⑦ ⑤に戻る。

3. プロジェクト結果

3.1. 第1回配布

2021年9月25日に中心市街地で開催された広瀬川文化交流会にて、「NO密マップ」を100部配布した。飲食店の情報は、群馬県前橋市が管理・運営している『Maeteku～マエテク～』の情報を基に作成した。また、配布と同時に中心市街地に関するアンケート調査も行なった。



図2 第1回配布の「NO密マップ」



写真3 「NO密マップ」を配布・説明する様子
3.2. 第2回配布

2021年10月23日に中心市街地で開催された広瀬川 night テラスにて、「NO密マップ」を200部配布した。第1回配布時の反省から、より見やすくなるような色使いやデザインに変更した。また、どのような場所か訪れたことがない人にもわかりやすく伝えるためにオープンスペースやベンチの写真を地図付近に配置した。他にも、お手洗いやバス停の位置を書き加えた。飲食店の情報は各店舗に問い合わせをし、最新の情報に一新した。そして、イートイン、テイクアウト、デリバリー等の営業形態を一目でわかるようにアイコンにして書き加えた。また、配布と同時に中心市街地に関するアンケート調査も行なった。



図3 第2回配布の「NO密マップ」

3.3. アンケート調査

第1回配布時と第2回配布時の計2回アンケート調査を行なった。しかし、期間が約1ヶ月間しか空いておらず状況にあまり変化がないと考えたため、アンケート結果を1つにまとめた。

アンケート回答者は52人で、男性27人、女性25人であった。また、13人は中心市街地、29人はその他群馬県、6人は群馬県外に居住していた。年齢は、20代の割合が62.1%と約3分の2を占めており、学生や若者がイベントに多く参加していることがわかった。

3.3.1. 中心市街地に来る頻度について

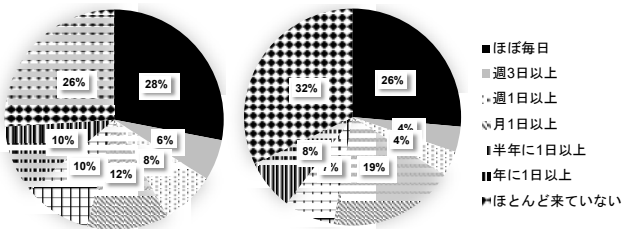


図4 コロナ以前中心市街地に来る頻度 (左)
コロナ以降中心市街地に来る頻度 (右)

新型コロナウイルス感染拡大以前と以降で、中心市街地に来る頻度に変化があったかどうかを尋ねた結果が図4の通りである。ほぼ毎日来ていると回答した人の割合にあまり変化がないため、中心市街地に居住している人や仕事で中心市街地を利用している人が回答したと考える。週3日以上・週1日以上・半年に1日以上・年に1日以上来ている、ほとんど来ていないと回答した人の割合が減少しているため、新型コロナウイルス感染拡大は、中心市街地に来る機会を減少させる大きな要因となっていると推測される。

3.3.2. テイクアウト・デリバリーを利用する頻度について

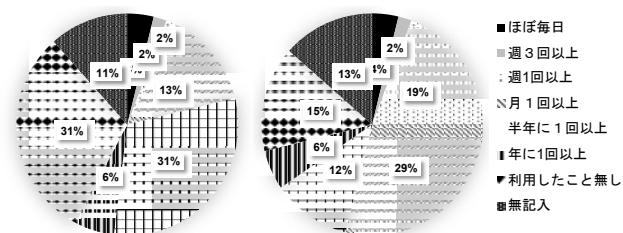


図5 コロナ以前利用する頻度 (左)
コロナ以降利用する頻度 (右)

新型コロナウイルス感染拡大以前と以降で、テイクアウト・デリバリーを利用する頻度に変化があったかどうかを尋ねた結果が図5の通りである。コロナ以前は、半年に1回以上利用する・利用したこと無しと回答する人で約3分の2を占めており、テイクアウト・デリバリーは浸透していなかったことが推測される。しかし、コロナ以降



写真4 アンケート調査の様子

は利用したこと無しと回答する人が約半分の15%に減少しており、月1回以上利用すると回答する人が2倍以上の29%に増加しているため、飲食店に対する需要も増加していると考えられる。

3.3.3. 「NO密マップ」について

記述式で「NO密マップ」について尋ねると、次のような回答を得た。

- ・場所がどこにあるかがわかりにくい
 - ・イラストがありイメージしやすい
 - ・店舗の情報だけでなく、料理や価格等の情報も欲しい
 - ・駐車場や駐輪場の位置を記載して欲しい
- 以上の回答から、飲食店の情報が記載されているページ、地図が記載されているページのどちらも改善点が見受けられた。

4. 考察・今後の展望

テイクアウト・デリバリーの利用頻度が増加しているという状況では、飲食店の情報が一覧となっている「NO密マップ」は利用促進に効果的であると推測する。また、新型コロナウイルス感染拡大以前と以降では、中心市街地に来る頻度が減少しているということが明らかとなったため、コロナ対策を万全にし、新しい利用者が集客することができるように「NO密マップ」を更に多数の人に配布したいと考える。

今後も、アンケート調査の回答を活かし「NO密マップ」の情報やデザインをバージョンアップしつつ、中心市街地でのイベント開催時の手渡しだけでなく、中心市街地外でのイベントへの参加、店舗への設置等も検討していく。また、利用者へのアンケート調査だけでなく、飲食店へのアンケート調査も行い、「NO密マップ」によって集客や利用頻度に違いが見られるのか、効果の検証を行いたい。

規格外農産物を用いたジュースと堆肥作りによる市民交流の創出と資源循環型まちづくり

～群馬県前橋市を対象として～

規格外農産物循環型社会実験チーム 代表 後藤恭佑
(前橋工科大学工学部総合デザイン工学科卒業生)

関西ブロック 杉浦榮
(前橋工科大学環境デザイン領域 准教授)

1. プロジェクト背景・目的

持続的な循環都市を形成するための有効な方法として都市農地が注目されている。近年の人口減少に伴い計画的に都市空間を縮退させ、郊外部から発生する空地の有効活用や管理を促し、耕作放棄地の発生を抑止しながら都市と郊外を結ぶことが必要であり、都市緑地としての都市農地には、多様な役割と機能が期待される。都市農地の実現には、都市住民と郊外住民（農家）との円滑な交流や連携が必要と考えられる。

また、野菜・果物には「規格外農産物」というものが存在し、判断基準は主に大きさや形・品質・色味・重量で、特に全国で規格外野菜が発生する割合は年間 30%となっている。規格外農産物の多くは直接消費者に届くことは無く、どのくらいの規格外農産物が廃棄されているのか定かではない。さらに、コロナウイルスの影響で食品ロスが増え、飲食店に卸すはずであった農産物が市場に溢れ、豊作貧乏という言葉ができるほど出荷先がなくなっているため、廃棄品も増えていることが予想される。

本プロジェクトでは、廃棄されてしまう規格外農産物を活用し、都市と郊外の課題を解消する一助となるよう循環型都市モデルを考察し、前橋市を対象としてモデル案の検証を行い、循環型都市実現への示唆を得ることを目的とする。そして、近隣農家の方等の学外の協力者とチームを形成し、更に前橋市の商店街や前橋市役所市街地整備課の協力と JUDI の助成を得て、産官学連携の取り組みとしてプロジェクトを開始した。

2. プロジェクトの遂行方法

2.1. 循環型都市モデル（仮説）に向けて

本プロジェクトでは、特に食べやすさや加工のしやすさを考慮し、規格外農産物の中から果物に着目し、前橋市農政課の HP に掲載されている郊外住民（農家）に協力を呼びかけた。

- ① 郊外住民から引き取った規格外農産物をジュースに加工し、加工の過程で出た搾りかすをコンポストに入れ、堆肥を作成した。
- ② 堆肥化した搾りかすを緑地に散布し、緑地の堆肥として活用する。
- ③ 規格外農産物の活用方法としてジュースを都市住民に周知し、提供元の郊外住民を紹介する。
- ④ 市街地再整備の活動を郊外住民に規格外農産物の販売を通して周知する。



図1 循環型都市モデルイメージ

2.2. 実施方法

前橋市の中心市街地で行われるイベントに参加し、(図1)の循環型都市モデルに基づいた交流を行った。また、都市住民に対しては規格外野菜の周知について、郊外住民に対しては交流会につい

てのアンケート調査を行った。

3. 前橋市における循環型都市モデルの適応（仮定）

全国で廃棄される規格外農産物の量は、農林水産省が実施している作況調査による生産量と市場の流出量の差から推計すると、野菜・果物を合わせて約2,074,000tに上ると考えられる。この推計した規格外農産物の量を、全国の作付面積と前橋市の作付面積の比率を用いて換算し、前橋市内の規格外農産物の量を算出したところ約3,800tになると推計された。

農産物を搾ると、約半量がジュースとして抽出され、約半量がパルプとして排出される。さらに排出されたパルプと同量のぼかしを混ぜ、コンポストにいれ堆肥を作成すると、農産物と同量の堆肥が得られると仮定すると、前橋市から出る規格外農産物から同量の約3,800tの堆肥を作成することができるかと推計される。

この規格外農産物から得られる堆肥を用いて、前橋市中心市街地活性化基本計画に定められた重点区域を対象として遊休土地（約4.6ha）を緑地に変換することを想定する。緑地に必要とする堆肥の量は、緑地面積1m²に対して土壌1m³のうちの約1割とし、堆肥の比重を0.7程度とすると、必要とされる堆肥量は約3,200t程度と推計される。

よって、前橋市において廃棄される規格外農産物から作成する堆肥約3,800tにより、対象の遊休土地を緑地に変換するために必要な堆肥約3,200tを捻出することができるかと考えられる。

現在、対象の重点区域では航空写真から俯瞰した緑地面積は約7.8%であるが、規格外農産物から作成された堆肥を用いて遊休土地を緑地に変換することで、緑地率は約18.4%増加し、計約26.2%へと向上する可能性が示唆された。

3.1. 交流会

第1回目（写真1）は9月25日に重点地区付近にある城東町立体駐車場屋上にて行い、梨を160個仕入れ、55個販売、105個廃棄となった。提供元は下大島果樹組合 組合員有志（4名）から有料で仕入れ、1個100円で販売し、希望者にはジュース作りを行った。廃棄については、無料配布または、コンポストに入れ堆肥化を行った。

第2回目は10月24日に重点地区内にある弁天通りにて行い、林檎を106個仕入れ、98個配布、8個廃棄となった。提供元は木村農園から無料で仕入れたため今回は無料で配布し、希望者にはジュース作り（写真2）に加え、堆肥作り（写真3）、アンケート調査や循環型都市モデルの仕組み（図1）の説明を行った。また、第1回目で作った堆肥を前橋市公園管理課の協力のもと広瀬川河畔緑地に散布した。（写真4）

第2回目の結果から、改善点を踏まえ、第3回、4回を行った。改善点は以下である。

- ・腐った部分を事前に取り、腐食が進むことを防いだ。
- ・本活動のチラシを作成し参加者に配布した。
- ・参加者の交流意識についてヒアリングを行った。
- ・コンポストの作成を体験してもらった。
- ・堆肥の説明を行った。

第3回：11月28日に重点地区内にある中央通りにて行い、29人が参加し、林檎を29個配布した。

第4回：12月12日に重点地区内にある白井屋ホテルにて行い、17人が参加し、林檎を17個配布した。



図2 交流会写真

3.2. アンケート結果

表1 アンケート内容

	Q4(規)という言葉聞いたことがあるかないか	選択肢より単一回答
規格外野菜について	Q5これまでに(規)のイベントに参加または主催したことはありますか	選択肢より単一回答
	Q6普段(規)を食べますか	選択肢より単一回答
農業について	Q7普段直売所は利用しますか	選択肢より単一回答
	Q8ご自身で何を育てたことがありますか	選択肢より複数回答(自由回答あり)
	Q9今回のイベントに参加してみようとしたか	選択肢より単一回答
イベントについて	Q10イベントに参加してみたいご意見・ご要望・感想等がありましたら、ご自由にお書きください	自由回答

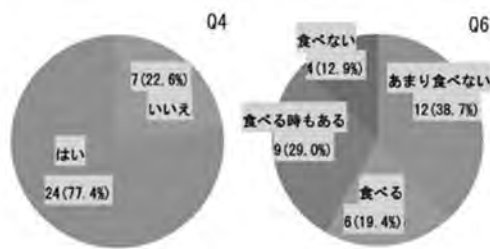


図3 アンケート結果（一部抜粋）

表2 アンケート内容

	Q4 疑問のことある？	選択肢より単一回答
	Q5 購入したことある？	選択肢より単一回答
	Q6 今後(あり)	選択肢より単一回答
	Q7 今後(なし)	選択肢より単一回答
	Q8 農産物の販売が買い物先の選択に影響するか	選択肢より単一回答
	Q9 規格外の販売価格	選択肢より複数回答
認知と交流	Q10 規格外を購入する理由	選択肢より複数回答
	Q11 購入しない理由	選択肢より複数回答
	Q12 規格外を購入したことがある場所	選択肢より複数回答
	Q13 普段農家と交流しますか？	選択肢より単一回答
	Q14 頻度は？	選択肢より単一回答
	Q15 いつ交流しますか？	選択肢より単一回答
	Q16 農産物の規格について	選択肢より単一回答
	Q17 中心市街地に訪れる理由	選択肢より複数回答
	Q18 どれくらいの頻度で中心市街地に行くか	選択肢より単一回答
	Q19 再整備について	選択肢より単一回答
まちなかについて	Q20 デジコン	選択肢より単一回答
	Q21 欲しい機能	選択肢より複数回答

第2回目の交流体験にて規格外農産物の認知度を図るためにアンケート(表1)を行ったところ、(図3)のような結果が得られた。

第3回、第4回で聞いた内容は規格外農産物の仕入れ元や都市住民が郊外住民とどのくらいの頻度で交流する機会があるのかを重点的に集計した。行ったアンケートの内容は(表2)である。

4. 考察

4.1. 第2回アンケートについて

アンケートについて、Q4『規格外野菜という言葉を知っていますか』という質問に対して、31人中7人(22.6%)が『いいえ』と答えた。規格外野菜の認知度を考察するために、『いいえ』と答えた7人を抽出し、他の質問と照らし合わせた。Q6『普段規格外野菜を食べますか』の質問に対して、7人中6人が『食べる』や『食べる時もある』、『あまり食べない』と答え、1人が『食べない』と答えた。直売所で規格外野菜が売られていることがあるが、直売所では規格が明確に定められていないため、規格外野菜という言葉を知ることがないと考えられる。また、規格外野菜という言葉を知ることがないことと野菜を食べたことがあることには関連がないことがわかった。これは、規格外野菜というものの意味が正しく認識

されていないことが考えられる。交流会に関しての質問に対して、31人中『よかった』が24人、『まあまあよかった』が5人、『どちらでもない』が1人、『無回答』が1人とあり、自由回答欄には『循環型の仕組みが出来れば良い』や『スーパーなどで買う程度で遠い話だったが、群馬県で出ているということを知り身近に感じられた』などの回答を得た。規格外農産物という商品を置いているお店などは認知までのハードルが高く、一般に流通しにくいことが考えられる。また、堆肥を散布する場所は広瀬川河畔緑地の一角(図2)に散布したが、緑量が堆肥によって増えたか定量的な評価はできていないため、植樹などの方法によって明確に表すことが必要だと考える。

4.2. 第3回・4回アンケートについて

『イベントの時に交流する』や『近所だから』という理由で交流することが分かった。しかし、回答者のうち交流があると答えたのが46人中7人という結果であり、郊外住民と都市住民の交流が日常的にないことが考えられる。また、近所に農家がおりに交流があったとした回答者は会社員や主婦、パート・アルバイトの属性だったため、都市住民として分類することにする。

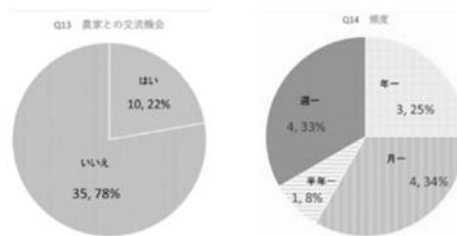


図4 アンケート結果

5. 結論

全4回の交流会を通して、規格外農産物の存在や調理方法などの周知が不十分であり、継続的に続けて活動を行うことの必要性があると考えられる。また、イベントでジュースづくりを調理方法の一つとして出店することで参加者に非日常体験を提供することができたと考えられる。

5.1. 植栽の経過観察の結果

2回目以降の堆肥を、前橋市市街地整備課の協力を得て、再整備される広瀬川河畔の植栽帯の1つに施肥した。毎週金曜日(原則)、堆肥を使用した植栽と市販のバーク堆肥を使用した植栽の、5月16日から9月29日までの撮影を行った。



5月16日 バーク堆肥



9月29日 バーク堆肥



5月16日 コンポスト堆肥



9月29日 コンポスト堆肥

5.2. 活動の看板の作成

今回支援いただいた活動は、多くの方々のご協力があり、実現することができた。その感謝をこめて、協力してくださった農家や研究室の皆様の名前を示し、またプロジェクトを周知し活動を広げるため、活動の様子を表すInstagramへ繋がるQRコードを付し、周囲の風景に溶け込むようなデザインにした。今後は、仕組み化を行い、継続的にこの活動ができることを目標にしていきたいと考えている。



7月25日 バーク堆肥



6. 謝辞

規格外農産物循環型社会実験チームが提案する循環の仕組みは、不足する部分や改善点が多く挙げられるが、本プロジェクトを支援して頂いたJUDIの皆様、前橋市役所の皆様及び都市・環境デザイン、ランドスケープアーキテクチャー研究室の皆様、協力して頂いた農家の皆様にお礼を申し上げます。



7月25日 コンポスト堆肥

里山交流拠点・かせやまの森創造センターの整備

～里山タイプ都市緑地・人口流入都市の里山コモンの可能性を探る～

関西ブロック 中村伸之

20世紀後半の急激な都市拡大は、人口減少・経済の低成長化が原因で21世紀初頭に終息した。

関西圏では千数百年間拡大し続けてきた都市圏が成長の限界に到達という世界史レベルの「大事件」が起きた。(2020年 JUDI 第7回研究発表会講演集 14～18p 参照)

本プロジェクトはニュータウン開発の残滓となり荒廃した森を、里山タイプの新しい都市緑地として再生できるか？その担い手はどのように構成されるのか？里山を生かした次世代の仕事づくりは可能か？を探る実験である。

本プロジェクトの企画段階では、3年程度の期間を想定し、次のようなことを考えていた。

【目的】

京都府木津川市のニュータウンと農村に囲まれた里山(約300ヘクタール、うち約150ヘクタールが学研都市のクラスター)の中に交流拠点「かせやまの森創造センター」を整備して、こそだて・食農事業・アートの市民活動の場として、未来のコミュニティづくりの場として活用する。

【内容】

約1ヘクタールの谷間で湿地の排水改良、見晴台、休憩所、テーブル・ベンチ、竹デッキ、カマド(調理場)などを整備して、こそだて・食農事業・アートなど各団体が快適に活動できる場とする。当会でも「かせやまの森学校」を開催し、川や森の「遊びの庭」づくりやアート教室を開く。

【得られる効果】

里山の利用価値が見直され、各団体の活動が活性化し、未来のコミュニティの核が生まれる。長年放置され荒廃した里山の生物多様性が回復するきっかけとなる。

里山を活用した新たな都市緑地のモデルケースとなる。

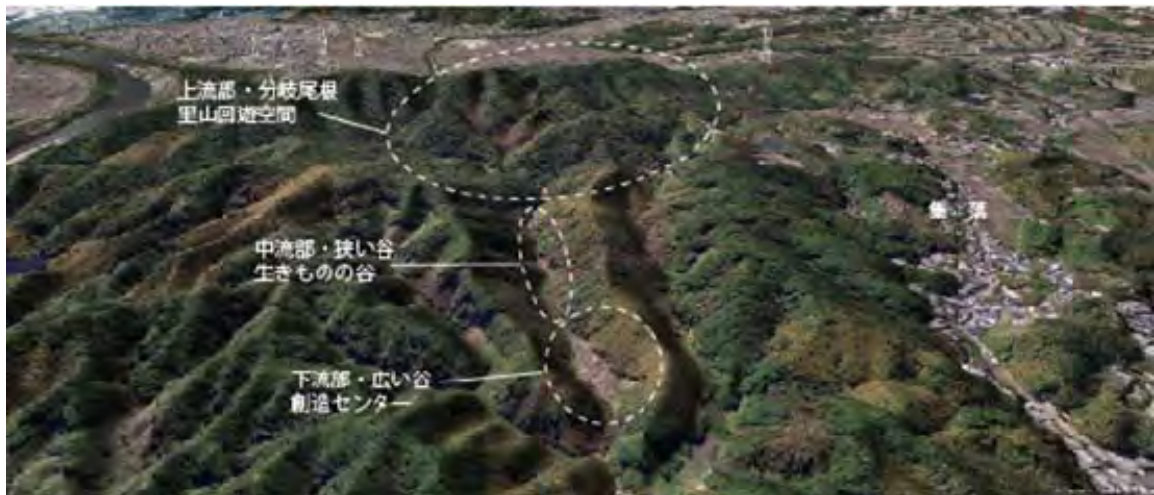
次世代の仕事づくり、持続的な社会の足掛かりになる。

【実施計画】

1. 「かせやまの森学校」開催(月1回)
2. かせやまの森創造センターの整備は、こそだて、食農事業、アート教室などこの土地を活用するグループのアドバイスを受けつつデザインする。

【補足】

- 事業が行われる土地は木津川市市有地で、関西学研都市「木津北地区」(150ヘクタール)の一部であり、2003年にニュータウン開発が中止となった里山である。
- 木津北地区は「生物多様性地域連携促進法」に基づいた再生プランが立てられ、市民、企業、行政が連携して保全活動が行われているが、広大な面積の一部しか手が付けられていない。奥地では森林の荒廃や道・川の崩壊が進んでいる。
- 活動団体有志が集まり2019年に、山全体の未来を考え、地元鹿背山区住民が中心に運営する「かせやまの森創造社」を設立した。
<https://www.kaseyama-sozo.com/>
<https://www.facebook.com/kaseyama.sozo>
- かせやま(鹿背山)は万葉集にうたわれた歴史ある土地である。多様な人々が集い未来の里山コミュニティをつくる機運が生まれている。(広報誌『けいはんな view』2021.03 参照
<https://kicx-icu.com/ddc/keihannaview/>)
- 奈良時代以降、古代の都市は里山の資源を利用して発展してきた。奈良・京都・大阪の都のネットワークが、今日の近畿都市圏＝世界屈指の大都市圏の原型である。
- 関西学研都市は三都ネットワーク中心の丘陵地(里山)を都市開発するプロジェクトであるが、最終段階の2003年に、木津北地区(かせやまの森)の手前で開発中止となった。
- 2022, 23年度にも事業を継続し、テーブル・ベンチ・テント増設、ピザ窯・ウッドデッキ新設、広場拡張、生き物の池づくり、山の植物の避難地づくりを予定している。



木津北地区の全景。手前が「かせやまの森創造センター」



「かせやまの森創造センター」のロケーション。



小川も流れている。夏は涼しい。



地元の人が管理する菜園もある。



竹を組んで日よけシートの休憩舎を作った。



高校や小学校が授業で活用してくれる。



カマドを作った。

農と住が共生したまちづくりに関する具体的アクションの展開

関東ブロック 鈴木俊治（芝浦工業大学）

1. 背景

都市近郊地域においては、開発圧力の増加、スプロールの拡大、後継者不足などを原因として農地の減少が進んでいる。市街化区域内農地については、本年は1994年の生産緑地法改正から30年となり、当時生産緑地に指定された農地が一斉に期限を迎える年に当たり、相当の農地が生産緑地解除されることが想定され、緑環境の保全・継承に少なからぬ影響があると言われてきた。

市街化区域は当初から広めに設定されていたこともあり、市街化区域内においては農地の多くが農家の相続を契機として宅地転用された。その際、税制上の規定（納税期限等）や都市・地域マスタープランの実効力不足などを一要因として、農地と宅地が無関係、無秩序なまま、いわゆる乱開発、ミニ開発が進められてきた地域が少なくない。



写真1 スプロールした宅地 西武立川駅近傍



図1 短冊状の区画割と生産緑地の状況
西武立川駅周辺

一方、生産緑地の意義として農産物生産に加えて都市の緑地やオープンスペースの確保といった多面的な意義の認識が広がっている。さらに近年ではコロナ禍のため、地域における自然とのふれあい、コミュニティ再生などのニーズが高まっており、市民の間で都市の緑、オープンスペース、交流の場として農地への関心が高まっている。

2. 目的

そのような状況を背景として、都市農地について市民意向を把握しながら、景観づくり、コミュニティ形成、土地利用、都市デザインなどの観点で検討を進める必要があると考えられる。

そのため、調査や計画を行うに際して実際に市民と触れ合う場、きっかけとして農産物販売、市民アンケート調査、イベントなどに「屋台」を活用することとした。本プロジェクトは一般社団法人アートインファームと芝浦工業大学環境設計研究室が共同で実施した。

3. 木製屋台の設計・制作

屋台の設計・制作は2021年8～9月にかけて、筆者及び筆者が主宰する芝浦工業大学環境設計研究室が行った。設計に際しては以下の点を条件とした。

- ・ 屋台を活用して農産物の販売やアンケートなどを実施できる形状、サイズとする。
- ・ 計画設計系の教員、学生が制作できる、比較的簡素なものとする。
- ・ 材料は大学近隣のホームセンターで購入可能な、標準的な木材、金具類とする。一般に入手しやすく、搬出入も容易なように天板サイズは900x450mmとした。
- ・ 電車や宅配便でも運べるようにするため、分解可能とし、分解や組み立てが容易に短時間でできるものとする。

- ・ 木の枠組みに加え、日よけや装飾を行い、実用的であるとともに親しみやすい屋台とする。



写真2 屋台の制作のようす

4. 屋台の活用状況

1) 農地、地元農産物に関する市民意向調査

JA みどりの協力により、立川市にある農産物直売所みの一れ立川において、2021年11月14日（日）に来訪者アンケートを実施した。質問内容は「農地や農業との関わり方についての意向」、「地域の農地や農業に期待したいこと」、「居住地域に農地があることについての考え」、「居住地域において充実してほしい機能」などである。

アンケートは、直売所の出口付近に屋台及びテントを置き、そこでアンケート配布・記入・回収を行った。回答者には謝礼として直売所で販売している野菜ひとつをプレゼントした。

買い物客70名から回答を得、約8割の人が農業とのかかわりに関心を持っていること、直売所や地元産の野菜が重要視されていることが分かった。



写真3 JAでのアンケート実施の様子

2) 農地での無人販売

2021年11月に立川市にあるI農園において、屋台を利用して無人販売を行った。同農園はブドウを主産物としているがブドウの季節は終わっていたため、ゆずの販売を行った。



写真4、5 屋台を用いた野菜果物の無人販売

3) 自然庭園での活用

2022年8月～9月にかけて、東京都世田谷区にある「桜丘すみれば自然庭園」において、こどもたちへの絵本読み聞かせイベントなどで本屋台が活用された。同園は区立公園（都市緑地）であり、2003年の開園以来市民運営グループ「世田谷すみればネット」と（一財）世田谷トラストまちづくりが協働して運営管理を行っている。同園内にある管理センターでは定期的に音楽会や子供たちを対象としたイベントを行っている。



写真6 屋台を利用した絵本読み聞かせ

5. 今後の活用予定

2022年10月以降は、再びI農園においてアートイベント、無人のブドウ販売などに活用する予定となっている。

6. 考察

今回制作した屋台は小さなものではあるが、以下の点において成果があったと考えている。

- ① 農と住が共生したまちづくりを考えるにあたり、農地に近いところで、住民、農家、産直利用者などと交流したり、意見交換・意向調査をする契機となった。
- ② 学生にとっては研究室にて木製屋台を制作するとともに、それを用いて地域に出るよい機会を得た。

この屋台は今後も数年間は利用できると考えられ、これからも屋台を用いて地域交流やまちづくり関係調査を継続していきたい。

以上

フォトコンテストから読み解く“那覇らしい風景”

～100年後に残したいまちかど風景から未来のまちづくりを探る～

琉球ブロック

1. プロジェクトの目的

2021年5月20日に那覇市は市制施行100周年を迎えた。都市環境デザイン会議琉球ブロックでは、那覇市市制100周年記念事業に「那覇まちかどフォトコン」を応募し、選定された。

「那覇まちかどフォトコン」を通して応募された写真やコメント等から、100年後に残したい「那覇らしい風景」を分析、未来のまちづくりのあり方を検討し、市民へ発信することを目的とする。

2. プロジェクトの概要

当フォトコンは、インスタグラムを使って写真を募集した。分析にあたっては、審査会を開催し、様々な視点で意見交換を重ねた。活動の概要は以下の通りである。

(1) 準備期間

期間：2021年4月～6月

- ・実施要項、案内チラシを作成した。
- ・観光関係やまちづくり関係への周知活動を実施した。

(2) フォトコンテスト実施期間

期間：2021年6月1日～8月31日

- ・要項を基にふさわしくない作品は除外した。
- ・計438点の作品応募があった。

(3) 一次審査

期間：2021年9月17日、24日、10月1日

- ・438点の作品を印刷し、事務局にて要素別に分類し、絞り込みを実施した。結果、120点まで絞り込まれた。

(4) 中間報告会（展示会）

期間：2021年10月16～17日、11月1～9日

- ・那覇市内の大型商業施設及び那覇市役所の2箇所にて、1次審査結果120点を対象とした作品展示会を実施した。
- ・来場者に好きな作品3点の投票を実施し、計230件の投票が集まった。

(5) 二次審査

期間：2021年11月12日

- ・1次審査で選定した120点の作品を、事務局にて意見交換し、80点に絞り込みした。

(6) 3次審査（展示会）

期間：2021年12月11日

- ・午前中は那覇市内のまち歩きを実施した。
- ・午後は都市環境デザイン会議広報委員会や県内関係団体のメンバーによる3次審査会を実施し、グランプリ・準グランプリ、入選の受賞作品を選定した。

(7) 審査結果の公表

期間：2021年12月28日～3月末日迄

- ・インスタグラムにて3次審査の結果内容を公表し、受賞者に景品を送付した。
- ・フォトコンテストの応募全作品と結果内容をまとめたフォトブックを作成した。

(8) 那覇市との対話

期間：2022年9月28日

- ・フォトコンテストの結果内容を題材にした今後の那覇のまちづくりについて、那覇市都市計画課都市デザイン室と意見交換を実施した。



一次審査の様子

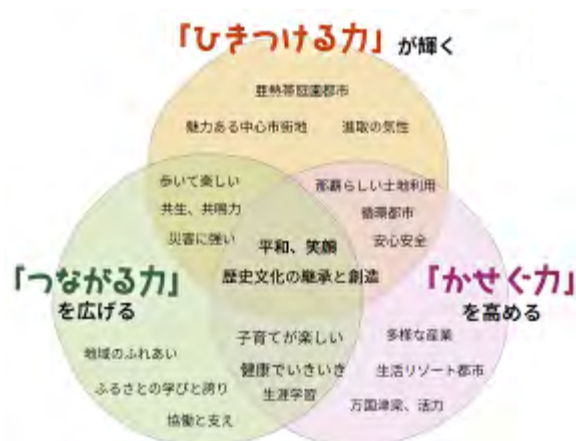


三次審査の様子

3. 応募作品を選定するための評価基準

一次審査では438点をグルーピングし、「那覇を感じるか」「100年後にも残したいか」の親和度から120点まで絞り込んだ。120点の作品を那覇市の大型商業施設と那覇市役所ロビーの2箇所で開催を行い、来訪者に好きな写真を投票してもらった。海を見渡す風景やライトアップされた夜のまちかど、路地裏といった作品への票が多かった。

二次審査では、投票結果も参考にしながら、那覇市のまちづくりを進める指針である「第5次総合計画」で掲げる未来への3つの視点「つながる力」「ひきつける力」「稼ぐ力」から選定を行い80作品に絞り込んだ。



第5次那覇市総合計画における未来への視点

4. 最終選定作品からみる那覇の魅力の分析

最終審査は、県外から都市環境デザイン会議広報委員会の方々、県内から那覇市都市計画課、那覇市観光協会、沖縄県建築士会の参加をいただき、多面的な意見交換を通して入賞作品を決定した。

選ばれた作品からみえてきたものは、亜熱帯の風土を強く感じさせる都市の海浜景観や地域のシンボリックの大木の存在、暮らしを支えてきた身近な井泉のある空間、更に琉球王朝文化から米国統治下の異国文化までもが幾層にも重なって表出する現代那覇の多面性とわくわく感であった。これらの景は、市民だけでなく来訪する方々にも深く感銘を与える風景であると考えます。

また、亜熱帯都市の水と緑や賑わい空間、ヒューマンスケールの心地よさ、歴史や文化、生活等が染みついた場の持つパワーなど、目には見えない価値も含めて「つながる力」「ひきつける力」「稼

ぐ力」が体感できるまちづくりの重要性が再確認される結果でもあった。



グランプリ作品



準グランプリ作品

5. まとめ

本プロジェクトでは、「那覇まちかどフォトコン」を通して、100年後に残したい「那覇らしい風景」を読み解き、今後の那覇のまちづくりを進めていくにあたってのイメージ像の具現化をフォトブック制作という作業を通して試みた。今回応募された作品により切り取られた風景には、多くの人々が魅力的だと感じる要素だけでなく、未来のまちづくりのヒントが含まれていることを実感した。例えば、緑のある風景には、心地よさだけでなく、雨水浸透の役割を担い、地域防災にも寄与する意味を持つ。よりよい風景づくりは、地域の魅力や生活の質を高め、持続可能なまちづくりにもつながっていくという意識を持つことが大切である。そういった意識啓発に、今回作成したフォトブックが一役買うことを期待しながら、今後も継続的に地域のまちづくりについて調査研究を進めていきたい

夜の水彩カフェテラス

～水辺空間を舞台とした地域の文化的創造実験Ⅲ～

関東ブロック 須永 倭子

旧中川という場所のポテンシャル

江東区には、小名木川、仙台堀川など、江戸期以降に掘られた人工の掘割が縦横に張り巡らされている。これに対し、区の東側を南北に流れる旧中川は、元の自然河川の地形を活かしたまま整備されている。

蛇行するこの川は、帆船の航行に具合がよく、昔は物流の幹線として船が行き来し、江戸への入り口(関所)として、船番所が置かれた重要な場所でもある。現在は治水のためのバイパスとして、荒川放水路ができて、旧中川の上流部は排水機場で閉じられた。下流部もロックゲート(閘門)で閉じられている。



旧中川と、川の駅の位置関係

川が閉じられ、水位を下げたことで、コンクリート護岸がいなくなり、これを外して水辺と人との距離が近い、多自然型護岸の手法で整備することが可能になった。都内でも珍しい景観を持つ河川である。

下流の船番所跡付近には、多様な水辺の拠点として公園が整備された。計画した江東区土木部では、日常使いを考慮し、簡単な飲食のできる賑わい施設や、川床、多目的スロープ、手漕ぎ船の乗

船場をつくり、公園の様々な利用に関する規制緩和を実施し、使い方の幅を広げた。

平成 25(2013)年 3 月 7 日には、完成を祝したオープニングイベント、「リバーフェスタ江東「旧中川・川の駅 川びらき」」が開催された。このイベント時に、私が理事長を務める NPO「江東区の水辺に親しむ会」が、地域団体として運営を引受けたことが、この場所にかかわるきっかけとなった。



リバーフェスタ江東のオープニングの様子

夜の水彩カフェテラス

2022年5月7日(土)に、3年ぶりに開催された本イベントは、午前中の準備段階で雨に降られたものの、昼頃にはやみ、それに合わせて来場者も徐々に増えた。

実施内容は下記のとおりである。

① テント出店(飲食、物販、ワークショップ)

前回まで参加していた地元飲食店やキッチンカーの他、他地域団体、大学等にも声をかけ、出店数を増やして実施した。

② 会場演出

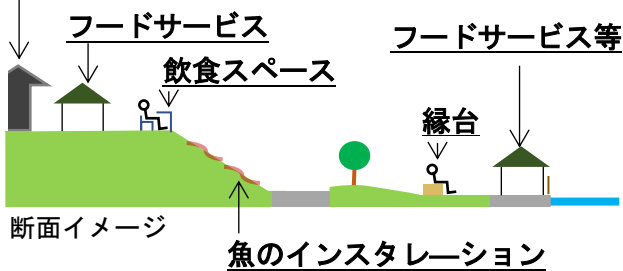
会場の高低差をいかし、飲食スペースはあえて上の方に設置、川が見渡せる位置にあることで、空間の広がりを感じられるようしつらえた。下の方には、水の近くでゆったりくつろいでもらう場所として、新たに縁台をつくり、設置した。縁台

は足元を行灯状にし、内側から淡く光るように演出した。



会場配置概要

にぎわい施設



断面イメージ



内側から淡い光を放つ縁台

その他の会場演出としては、店舗照明を増やした他、前回同様、近隣の保育園児たちに彩色してもらった魚を斜面に飾り、一つの作品とした。



魚のインスタレーション

③ 移動型蓄電池の点灯実験

今回新たに地元企業からの協力を得て、移動型蓄電池を使用した、店舗照明の点灯実験を行った。日中、会場で太陽光パネルを上げ充電し、日没後に照明用の電力として利用した。これは停電時の電力供給の可能性を探る実験としても有効であると考えたものだったが、防災的観点からの実験ができたと同時に、近くに電源のない川沿いにも店舗を設置することが可能となった。



天井に太陽光パネルを搭載した移動式蓄電池 (写真右側)

④ 水面の利用(ナイトクルーズとラジコンヨット)

毎年恒例のナイトクルーズは、イルミネーションで飾られた船で運航、3便、計36席がすぐに予約でいっぱいになった。事前予約制であるにもかかわらず、当日乗船希望者も多数あった。

毎週末日中活動しているラジコンヨットの同好会は、夜ライトアップしたラジコンヨットを水面に浮かべ、会場演出に一役買ってくれた。



イルミネーションを付け走るラジコンヨット

来場者の反応

コロナ禍で、久しぶりのイベント開催となったこともあり、予想以上に人がたくさん集まった。

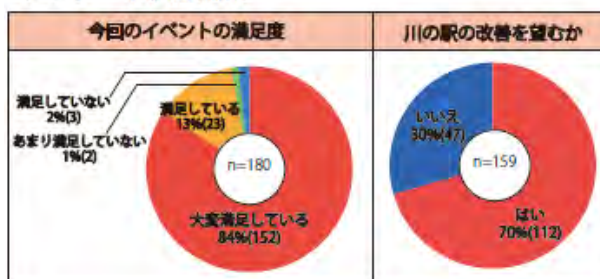
開催問合せの電話もなりっぱなしの状態だった。

芝浦工業大学の学生には、簡易アンケート(ボードにシールを貼ってもらう形式と、一部の回答者への聞き取り調査)を実施してもらった。

その結果、本イベントについて、「大変満足している」、「満足している」合わせて、97%という回答を得た。川の駅の改善については、70%から改善して欲しいという回答があり、座れる場所を増やして欲しい、にぎわい施設の品揃えを増やして欲しい等、今後もこの空間を利用したいという意思が感じられた。

聞き取り調査では、定期的にイベントを行って欲しいという意見が多かった。

アンケート調査結果



訪れる人の動きを見ていると、会場は混雑していたが人の出入りは少なかった。滞留時間が長かったからではないか。加えて、近所から来た人が多かったのではないかと考えられる。

今後に向けて

今回の来場者の多さは、一時的なものとも考えられるが、イベント自体の知名度は上がったといえる。これまでは、たくさんの人に訪れてもらえるように、昼頃から開催していたが、今後は、本来の目的である夜の利用に特化して実施する案も出ている。また、よりゆったりと楽しめるような使い方も提案していきたい。

さらには、対岸の江戸川区とも協力し、より視野を広げたイベントを検討することにより、全体的なまちづくりにもつなげていきたい。これは、防災的な視点からも重要であるといえる。



渋谷円山町「三長プロジェクト」

～旧花街における「都市環境資源としての料亭」の利活用をめぐる課題と展望～

関東ブロック 鳥越けい子・稲田信之・須田武憲

1. はじめに：本プロジェクト成立の経緯

渋谷では近年、駅とその周辺地域を中心に、大規模な再開発整備事業が継続・展開している。そうしたなか、渋谷円山町はかつて多くの芸者衆を抱えた「花街」で、この地域の独自の歴史や文化を今なお色濃く残すエリアとなっている。

(図1.、図2-a.、図2-b.)。

鳥越(本プロジェクト代表)は、このまちの遺産の発掘・発信を、渋谷をはじめとするこれからの都市デザインの豊かな展開に繋がりたいと考え、2009年より「SCAPEWORKS 百軒店・円山町」(アートによるまちづくりイベントを兼ねた調査研究活動)を継続展開している。そうしたなか2019年11月29日、鳥越が所属するJUDI 関東ブロックと青学鳥越研究室との共催で「音風景で辿るまちの記憶と今」と題したまちあるき(図3.)を実施し、円山町にその建物が唯一残る料亭「三長」(写真1-a.、写真1-b.、図4-a.、図4-b.)を、その「意見

交換会・懇親会」会場とした。

その際、三長オーナーの高橋千善氏から「円山町と三長の歴史と今」に関わる話を聞く機会を得たこと等がきっかけとなり翌2020年、まちあるき参加者を主なメンバー(表1)として「JUDI 三長プロジェクト」が発足。「三長」を拠点に一連の研究会(ミニシンポジウム)を開催しながら旧花街における「都市環境資源としての料亭」の利活用をめぐる課題と展望の検討を活動目標とした。本プロジェクトの構成メンバーは表1の通り。

鳥越けい子*、須田武憲*、稲田信之*、井上洋司、作山康、平松早苗、木村圭子、金城正紀、杉山朗子、富岡仁計、三輪強、峰朗展、小浪博英、江川直樹、柳田良造

表1. *は幹事会メンバー

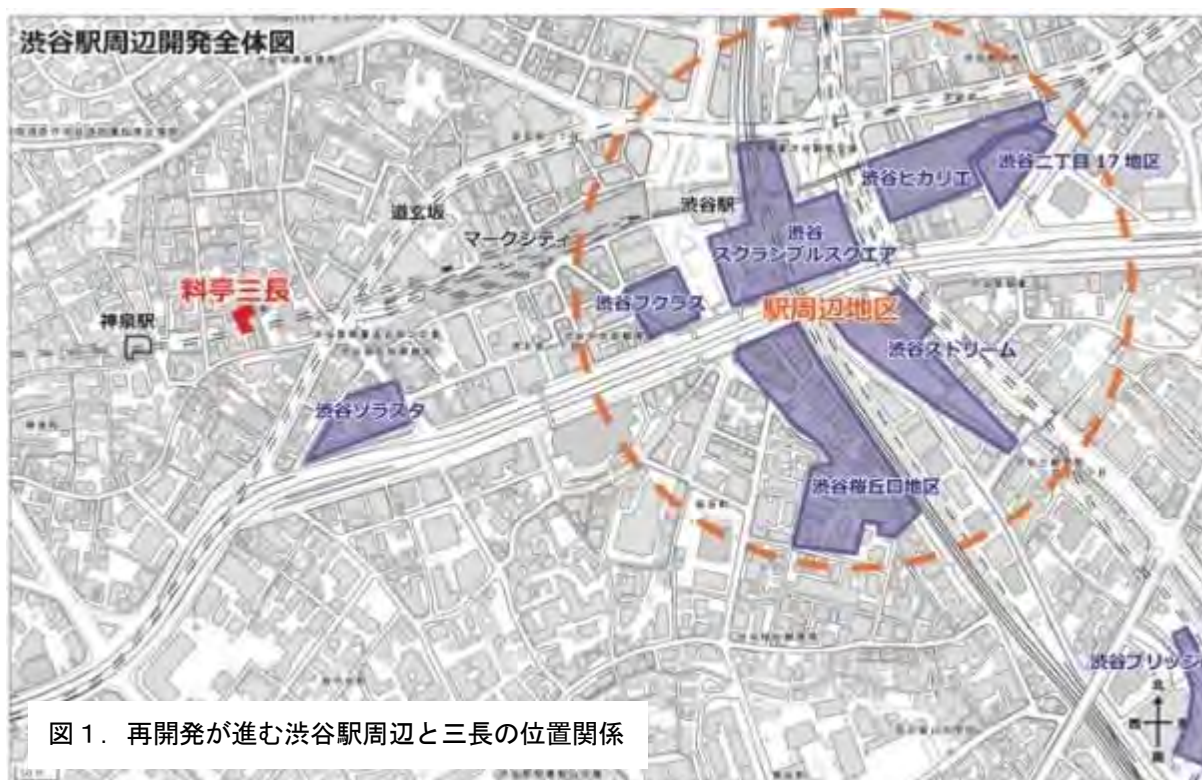


図1. 再開発が進む渋谷駅周辺と三長の位置関係



図 2-a. 料亭がひしめく円山町と三長の位置図
(昭和 30 年頃の住宅地図より作成)



図 2-b. 現在の円山町と三長の位置図 (令和 4 年
のゼンリンより作成)

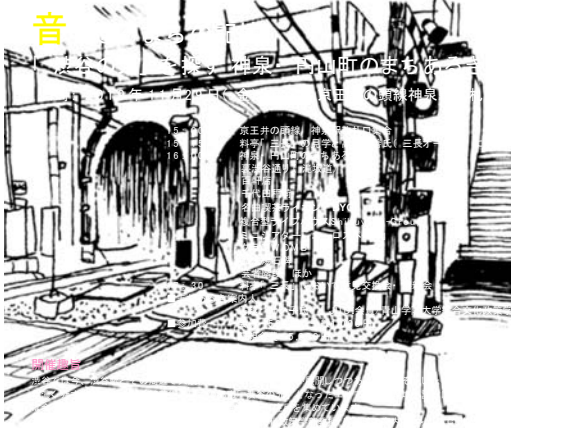


写真 1-a. 料亭「三長」外観



写真 1-b. 料亭「三長」二階大広間

都市環境デザイン会議 関東ブロック キャラバン
 JU/DI 関東ブロック主催 東北ブロック共催 青山学院大学総合文化政策学部 ACL
 (青山コミュニティラボ) 協力
提供先典 <http://www.sapp-work.jp/roundx01.html>



05 06 07 11

詳しくはこちらを参照してください
 申込み切
 2019年11月22日厳守

参加申込み先: JU/DI関東ブロック2019円山町キャラバン申込みフォーム
<https://forms.gle/SM1a2GW7bQhM4V88>
 お問い合わせ: 都市環境デザイン会議 関東ブロック幹事 平松早苗
some_hira@sra-td.co.jp 090-2736-4324

図 3. 本プロジェクト発足のきっかけとなった
2019年の関東ブロックキャラバンのフライヤ



図 4-a. 料亭「三長」
一階平面図



図 4-b. 料亭「三長」
二階平面図

2. 活動の概要

2020年、プロジェクト発足とほぼ同時期、コロナ禍が到来し、料亭三長は休業に追い込まれ「三長プロジェクト」もその活動開始の延期を余儀なくされた。(三長は休業期間を利用して「屋根の葺き替え」等の補修作業を実施した。)

2021年度には、コロナ禍が続くなか、第30期の活動計画内容を一部改変し、以下の4回のシンポジウムを(第2回以外はすべてオンラインで)開催した。各回の開催年月日・テーマ・報告者・内容の概要は次の通りである。

2.1. 第1回 2021年9月29日

サウンドスケープ・都市・円山町との出会い、鳥越けい子/青山学院大学総合文化政策学部教授

本プロジェクトの代表者(鳥越)が、専門とするサウンドスケープをテーマにした都市研究の最初のフィールドが約35年前の神田の花街(神田明神男坂)だったこと、さらに2008年の青学赴任以降に渋谷の花街(円山町)と再会したことを報告し、音風景から発掘される花街のかつての花街の環境文化資源とそれが失われていく過程における都市空間機能の単一化を解説した(写真2.、図5.)。



写真2. 1988年当時の神田明神男坂



図5. 記憶で綴る音年表：神田明神男坂(部分)「神田サウンドスケープ研究会」作成

2.2. 第2回 2021年11月24日

料亭の未来を創る-渋谷円山町「三長」の復活と継続への道、高橋千善/料亭三長オーナー

本プロジェクトがテーマとする料亭三長のオーナー(高橋氏)がその料亭と家族の歴史を(写真3.)、渋谷円山町との関係を踏まえながら振り返ると共に、料亭を中心とした花柳会のシステム、その建物と「花街としてのまちの記憶」と、今なお息づいているこの土地の芸の文化を未来に繋げる際の問題点、それを乗り越えるためにこれまで行ってきた各種の事柄や工夫、将来ヴィジョン等を語った。



写真3. 三長の原点となった豊澤亭(明治45年の竣工時 高橋千善氏提供)

2.3. 第3回 2022年2月23日

料亭の未来を創る-芝浦「旧協働会館」を中心として、藤井恵介/東京藝術大学客員教授・文化庁文化審議会委員

各種の建物保存を手掛けている建築史家・藤井恵介氏が、かつて芝浦花柳界の見番として建設され、戦後は港湾労働者の宿泊所となった都内に現存する唯一の木造見番建築が、現在は港区指定有形文化財となり、各種の伝統・地域文化を次世代へとつなぐための「伝統文化交流館」(写真4.)として活用されるまでの経緯、その運営等に当たったの工夫や課題を解説した。あわせて旧大倉喜八郎別邸をはじめ、同氏がその保存活動に関わった建物について語った。



写真 4 伝統文化交流館（港区芝浦）

出典：

<https://www.visiting-japan.com/ja/articles/tokyo/j13mn-kenban.html>

2.4. 第4回 2022年5月20日

GEISHA-SCAPE —「芸者さん」から街をとらえる、
浅原須美/ライター

全国各地の花街約50箇所にあぶ取材体験をもち「花柳界」についていくつかの書籍（図6.）を著しているフリーライター・浅原須美氏が、「花街」という地図に載らない不思議なまちの魅力、料亭文化のなかで芸者たちが担うものなど、「芸者さん」という切り口からとらえたまちの風景やその文化を、貴重な動画資料を交えて語った。最後に「八王子花柳界の今」を事例として「GEISYA-SCAPEの未来」を共に考えた。



図 6. 浅原須美氏の著書

3. まとめ：小冊子の作成

以上を踏まえ私たちは、今後の都市づくりにとって旧花街にはハード・ソフト両面にわたり貴重な環境文化資源がありながらも、その保存・利活用においては各種の課題が存在することを確認した。同時にまた、渋谷円山町にある料亭三長は貴重な存在であり、その存在を多くの人々に発信すると共に、三長を中心とした全国規模のネットワーク形成の可能性・必要性を確認した。

そのため、今期の活動を未来に繋げるメディアとして、第2回の講演内容を事例に料亭三長を中心とした円山町の歴史とその遺伝子を未来に繋げるための試みを紹介する小冊子（図7.）を作成することを以て、今期の活動を終えることとした。



図 7. 小冊子「料亭の未来を創る」の表紙

まちキネ再生に向けた市民連携活動その2

～第1期まちキネを計画としてきちんと総括すること～

東北ブロック 高谷時彦

■まちキネを見送り語る会 (2022.05.08)



FIG-1 見送る会ポスター

多くの市民に愛されてきた鶴岡まちなかキネマ(まちキネ)は、スポンサーである地元銀行の支援が打ち切られたことにより、2020年に閉館しました。

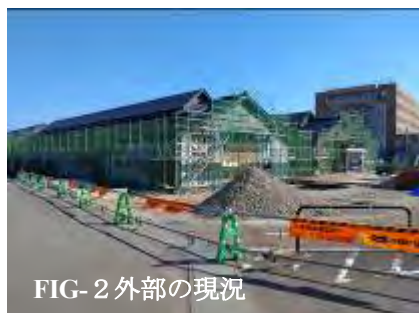


FIG-2 外部の現況

その後4つあるキネマの2つと多目的ホール(エントランスホール)の閉鎖・解体を前提として市が提示した「計画」は、唐突であるだけでなく、とても十分な検討を経たものとは思いませんでした。

私たちは、到達点のイメージを共有していたわけではありませんが、このままではいけないということで、「まちキネの存続と再生を願う会」(代

表菊池俊一山形大准教授)として、活動を続けてきました。前年度は1回目のJUDI活動助成をいただき、市民シンポジウムを開催したり、関係者への働きかけを行うなどの活動をしました。

今年度は現在の土地建物所有者と面談を行い、荒井幸博氏を中心に、文化資産としてのまちキネの保存活用を訴えました。真摯にご対応いただきましたが、考え直していただくことはできませんでした。市や銀行との面談は昨年度に終わっています。あとは市民の盛り上がりしか、うつつはありませんが、コロナ禍の拡大の中で、市民を巻き込むような活動は見送らざるを得ませんでした。

そんな中で2022年6月からキネマ1、2そしてエントランスホールの解体工事が始まることが通知されました。一つの節目です。私たちはこれまでのまちキネを第1期と位置づけ、第1期まちキネとは何であったのかをきちんと総括し、記録しておくことが大切だと考えました。その思いから市民とともに「見送り、語る会」を開催することとしました。

■壊れつつあるまちキネを見学

まず初めに市民は一部解体された「最後のまちキネ」を隅々までみて歩き、わかれを告げました。



FIG-3 内部(キネマ1)

すでに、スクリーン、座席の一部やスピーカーが取り外されており、何とも言えない喪失感に襲われました。重苦しい雰囲気の中で、取材にきたA新聞の記者が「ほかの選択肢があったはずだ。映画館を壊して事務室として使うことにどう意味があるのか、文化の破壊ではないか」と憤っていたことが、印象的でした。

■パネルディスカッション

見学のあとは、エントランスホール（ここもなくなります）でパネルディスカッションを行いました。

パネリストは以下の通りです（順不同）

荒井幸博（映画パーソナリティ）

後藤治（工学院大学理事長、建築保存）

三浦新（山王まちづくり社長）

菊池俊一（山大準教授）

田中宏（市議員）

早坂進（3月まで市役所のまちづくりリーダー）

高谷（JUDI）



FIG-4 スピーカーのあと

急な告知であったにもかかわらずスタッフと市民で30人ほどの参加を得ました。

今回はじめて、映画の専門家であり、まちキネの創設時のアドバイザーでもあった荒井幸博さんから直接

市民に語り掛けてもらうことができました。

■映画専門家の視点

荒井さんは、「まちキネは地方都市のユニークな映画館として十分存続できる条件を備えているし、経営的にはうまくやってきた」「銀行の支援がなくなったので、初期投資の返済の必要が出てきたことは分かる。しかし他の方法もあったし、スクリーンさえあればこれからも工夫の仕様はある。しかし前提となるのが規模だ。大きい方の165席あるいは152席のキネマを壊したらどうやっても映画館としての経営はできなくなる」「ある時期から、相談がなくなった。なぜ相談してくれなかった」ということを本当に熱く語りました。

ZOOMで参加してくれた後藤先生からも歴史的建築を残していくための貴重なアドバイスをいただきました。

■記録すべきこと、伝えておくべきこと（1）： 社会的企業による映画館の持続的経営

私は、第1期まちキネに別れを告げるにあたり2つのことをきちんと記録しておきたいと思いました。

第1は、社会的企業（ソーシャルエンタープライズ）（株）まちづくり鶴岡により第1期まちキネは、大変うまく経営されていたという事実です。

荘内銀行國井頭取（当時）の熱い思いと、荒井幸博さんをはじめとする多くの人たちの知恵を持ち寄って作られた（シネコンよりは小さく、名画座よりは大きい）4つのスクリーンと無料エントランスホールはフルに活用されていました。年間8万人を集め、1.3億円（最終年度、山形新聞の報道）を売り上げていたのです。閉鎖は当時の支配人にとっても寝耳に水でした。

確かに、初期投資にかかった借入金を返せなかったという意味では市が言うように「単なる民間の失敗事例」でしょう。しかし、中心市街地活性化計画に位置付けられたプロジェクトです。計画コンセプトや運営方法の実態的な分析や評価もなく、次の「計画」を進めてきたことが残念でなりません。荒井幸博さんが言うように、「地方都市で運営しやすい150、160席のキネマを壊して、80席、40席で運営するのは、映画館としては大変困難な選択だ。なぜあえて難しい選択をしたのか」という問いに対しても、計画論的あるいは経営的な視点からの反論はありません。そういう検討をしていないのです。

■記録すべきこと、伝えておくべきこと（2）： 中心部の文化的環境としてのまちキネ

第2点については、鶴岡と出会いその歴史文化を愛するT.Chapman教授（イギリス、ダーラム大学、専門は社会的企業論）の市長あての手紙にすべて書き尽くされています。

教授は第一にまちキネのような文化的施設（Cultural Venue）の有無が、人々の生活の質（Quality of Life）において決定的な重要性を持っており、簡単に壊すべきではないこと、仮に映画館として使えないにしても、劇場空間をうまく活用して中心部のにぎわいにつなげることを考えるべきであるといっています。

また、まちキネは建築としての美しさを持っており、それによりイギリスの賞も受けている。そ

ういう文化的価値を大切にしない都市は人口減少時代に生き残れないとも述べています。以上から、今こそ社会的企業（教授はソーシャルエンタープライズの研究者）が担ってくれた「公」を本来担うべき自治体が引き継ぐ番だと訴えています。

■これからのこと

私たちが存続を願った第1期まちキネはすでに姿を消しつつあります。

今後は、大変困難な条件の下で、残った2つのキネマを「映画館」として活用していく山王まちづくり会社の三浦社長を全面的に応援していくこととなります。三浦社長は、私が鶴岡のまちづくりに関わるようになって以来協働させていただいています。心から尊敬できるまちづくり人です。



FIG-5 キネマ4（40席）

残った2つのキネマにはいろいろな思いがあります。一番小さな40席のキネマはデザイン

テーマである絹糸の経、緯糸の絡みをどういふバランスで壁面に表現するのか、悩みました。しかしそれは楽しい時間でした。

苦しかったのは、このキネマだけが、契約工期を終えた時点でNC値（設計時に設定する音響的な静謐さを示す値）が達成できなかったことです。客席からは見えない狭いダクトスペースを必死の思いではい回り、設計図書の要求水準に達していない箇所を探しました。その時、最後まで設計者を信じて付きあってくれたのが建設JY若手の阿部直人さんです。お陰様で、何とかNC値を達成できただけでなく、その後音響性能の良さが評価され映画技術協会賞を受賞しました。

彼は、まちキネ閉館後も、何とか残せないかとアイデアを出してくれていました。優秀な現場人であると同時に、地元まちづくりのリーダーでしたので、その視点からも動いてくれました。

しかし、阿部直人さんは、まちキネ第1期を見送る会の1か月後、40代の若さで急逝しました。

阿部直人さんの遺志に応えるためにも、まちキネから映画の灯を消すことがあってはならないと思います。

最後になりましたが、この2年間に及ぶJUDIの皆様のご支援に深く感謝の意を表したいと思います。有難うございました。



FIG-6（上）
山形新聞

FIG-7（下）
荘内日報

半島と島嶼の環境デザイン・セミナー

中部ブロック 柳田良造

1. はじめに

JUDI 中部はここ数年「街道」、「ローカル線」などをテーマに公募型プロジェクトの活動を行ってきたが、今回は太平洋に面した中部地域の南部の「半島と島嶼」を舞台にした環境デザインセミナーである。「半島と島嶼」は現在の車社会でこそ不便な場所になっているが、かつて海上交通が中心の時代には「表」の場であり、地域の資源を生かした生業を作り出してきた。また信仰の場として、独特の暮らしの生活空間を作り上げてきた。特に紀伊半島南部や伊勢湾口の海岸や島嶼は、その環境的特徴として地形、歴史、生業、環境で他に類をみない特色を持つ。近年その空間的特徴や暮らしに注目し始めた若者の移住なども見られるようになってきている。本プロジェクトは紀伊半島南部の「半島と島嶼」を舞台に、従来培ってきた地

域の空間、暮らし、歴史のトータルな文脈の中で地域の場所を体験する環境デザインセミナーを開催し、地域の魅力を探り、環境のあり方を考えるものである。地域に魅力的な環境と見所がいっぱいである。当初鉄道を足に巡る企画をつくったが、鳥羽から紀伊半島の紀北町、尾鷲市への鉄道の便が不便なと、伊勢から紀伊半島へ向かう途中の山の中に面白い開発事例（多気町の「VISION」）があり、寄り道しようということで、鳥羽から紀伊半島へはレンタカーで巡ることとなった。

2. 一日目

参加者は8名で、東京・名古屋から5名、大阪から3名で、一日目はそれぞれ名古屋、大阪から近鉄電車に乗車し、伊勢半島の入口、鳥羽に集合した。鳥羽から伊勢湾口の島巡りだが、鳥羽から

半島と島嶼の環境デザイン・セミナー 伊勢湾口の島嶼と紀伊半島をめぐる

紀伊半島東南部の「半島と島嶼」を舞台に、地域の空間、暮らし、歴史のトータルな文脈の中で捉え直し、場所・生活を体験する JUDI 中部の環境デザインセミナーです。

■第一日 9月17日(土) 伊勢湾口の島嶼めぐりと「島の地域づくり」
 名古屋(近鉄)8:10→9:48 鳥羽駅
 大阪上本町(近鉄)7:45→9:36 宇治山田駅 9:37→9:48 鳥羽駅
 10:20 佐田浜港→10:33 菅島
 10:40~11:10 菅島見学
 11:15~14:00「菅島の未来を考える会」との懇談・昼食
 14:20 菅島~14:33 佐田浜港 鳥羽駅でレンタカーを借りる
 15:00 鳥羽→15:30 VISION(ヴィズン)
 15:30→16:20 VISION 見学
 16:20→17:10 尾鷲・民宿風帆 着
 18:00→19:30 夕食(民宿風帆)・懇親会

第二日 9月18日(日) 紀伊半島・尾鷲の町と海をめぐる
 07:30~08:30 朝食(民宿風帆)
 09:00~12:00 尾鷲漁港、天満荘、土井家、土井竹林、おわせ暮らしサポートセンターを見学
 12:00~13:00 昼食(尾鷲市街地)
 13:15~14:00 熊野古道センター見学
 14:00~14:30 車で熊野古道センターから須賀利地区へ移動
 14:30~15:00 須賀利地区漁村見学
 15:00~16:30 車で須賀利から鳥羽駅へ移動(途中紀北町江の浦、鏡子川を見学)
 16:30~16:45 鳥羽駅でレンタカーの返却
 17:02 鳥羽駅発~18:37 名古屋駅着(近鉄特急)解散
 17:16 鳥羽駅発~19:15 大阪上本町着(近鉄特急)解散



半島と島嶼の環境デザイン・セミナーのチラシ

菅島、答志島、坂手島、神島をめぐる計画であったが、適当な時間でめぐる船便がないことがわかり、菅島を中心に島と漁村の地域づくりを見学することに変更した。菅島については、企画調査の過程で、近年島の小学校の存続問題や空き家改修で頑張っている「菅島の未来を考える会」のリーダー小寺さんと知り合う機会があり、鳥嶼での地域づくりの実践として興味深い事例を探る機会になると考えたからである。その選択は結果オーライで、台風14号の影響で海が荒れ、神島行きの船は欠航し、少し沖に出ると波も高くなり菅島行きの双胴船も前後に結構揺れた。鳥羽港から13分ほどの船旅で着いた菅島の港には小寺さんはじめ、会のメンバーが出迎えてくれた。お互いに自己紹介して、彼らの案内で菅島の集落を巡り、高台に築かれた明治初期に造られた伊勢湾の入り口の安全を守る菅島灯台まで歩いた。足元に荒れる海を眺めながら、伊勢湾の入り口の安全を守ったレンガ造の菅島灯台の重要性を感じた。この灯台、重要文化財になる可能性もあるようだ。

戻って漁港を巡りながら小学校に向かった。小学校は港の中心に位置し、絶好の場所にあった。小学校の中の畳敷きの集会室で車座になりながら、美味しい弁当をみんなで食べた後、懇談会を開いた。



菅島灯台から港への帰り道



軽トラの荷台に乗って



菅島の集落・港・小学校と灯台



菅島の未来を考える会との懇談



極アジ用のタモですくう

菅島の現在の人口は492人、211世帯、島のコミュニティの中心である小学校の廃校危機問題を契機に、2016年に「菅島の未来を考える会」が誕生する。その取り組みとして、活動の3本柱、①移住・定住の推進（空き家リノベーション）、②新しい産業・価値の創造（極アジのブランド化、あおりの養殖）、③教育環境の充実（離島留学、コミュニティスクール）を核とする活動の様子を聞いた。菅島での生業は網を使わない一本釣りでのアジ漁などが中心となるが、活動ではじめて「極（きわみ）アジ」のブランド化とは釣り上げたアジを生簀に移す時に、タモに海水も一緒に掬える工夫がしてあって、アジを傷めず付加価値を高めるものである。Judi側の参加メンバーも様々な提案を投げかけ、盛んな意見交換の場になった。その後、島の交通の足である軽トラの荷台に乗せていただき、空き家リノベーションの見学や港を巡るなど、楽しい見学会となった。船着場で島からの船が離れるのをいつまでも手を振って見送ってくれたのが印象的であった。

菅島の見学後、船で鳥羽に戻り、鳥羽駅前デレ



菅島の空き家リノベーションの例

ンタカーを借りて、高速道路を伊勢から紀伊半島に向かい、別な意味で現代の地域の状況を知る意味から巨大商業開発「VISON」を見学した。山の中の立地といい、地形とサイトプラン、施設の内容、外構等、いい印象はなく、どう評価していいのか、みなさん困惑気味であった。

その夜は風雨が強くなった中、尾鷲の漁港近くの海辺の民宿・風帆（ふうはん）に宿泊。宿名は「順風満帆」からとったようで、古くは遊郭の経営から3代続く宿。庶民的ながらもなかなか、気持ちのいいおもてなしに、夜の懇親会は刺身の「舟盛り」を肴にみんな大いに盛り上がった。中上健次『紀州 木の国・根の国物語』は中上が紀伊半島を巡り、各地で人々の話に聞き入ったルポルタージュだが、尾鷲の長浜地区に遊廓があったことが記されている。宿の女将が元々は遊郭だったと話してくれたので、この地区の昔の呼び名は「長浜」ですかと聞くと、そうだと。山がすぐ後ろに迫り、道路一本を隔ててすぐ、波の押し寄せる浜に面する宿、ここでも女将がいつまでも手を振って見送ってくれた。



尾鷲での宿「風帆」と漁港

3. 二日目

二日目は、さらに台風の影響を心配しながらの旅となったが、午前中はまず、宿近くの尾鷲神社を訪ねる。「熊野古道」の難所のひとつで巡礼者たちに「西国一の難所」といわれた八鬼山峠と馬越峠のふもとに位置する尾鷲神社は、尾鷲地域の氏神である。続いて、RC造の尾鷲市庁舎を尾鷲檜材による耐震壁を活用し改修した事例を見学。ツアーに参加した河崎さんも関わった取り組みで、デザインとしてもなかなかいい仕事であった。



尾鷲神社
尾鷲市庁舎の檜材を使った耐震改修

続いて熊野古道センターを見学。熊野古道の世界遺産登録を記念して訪れる人々に地域情報を提供する研究施設として建設されたものだが、コンペで選ばれた建物も見もので、設計がアーキビジョン、尾鷲ヒノキ・熊野杉の地場産市場流通規格材を使用し、トラス架溝や集成材を使用せず大空間を実現したもので、13cm角の材を組んで柱、梁、壁をつくあげた建築美に感心する。湾を見渡す立地といい、気持ちのいい環境でしばし寛ぐ。

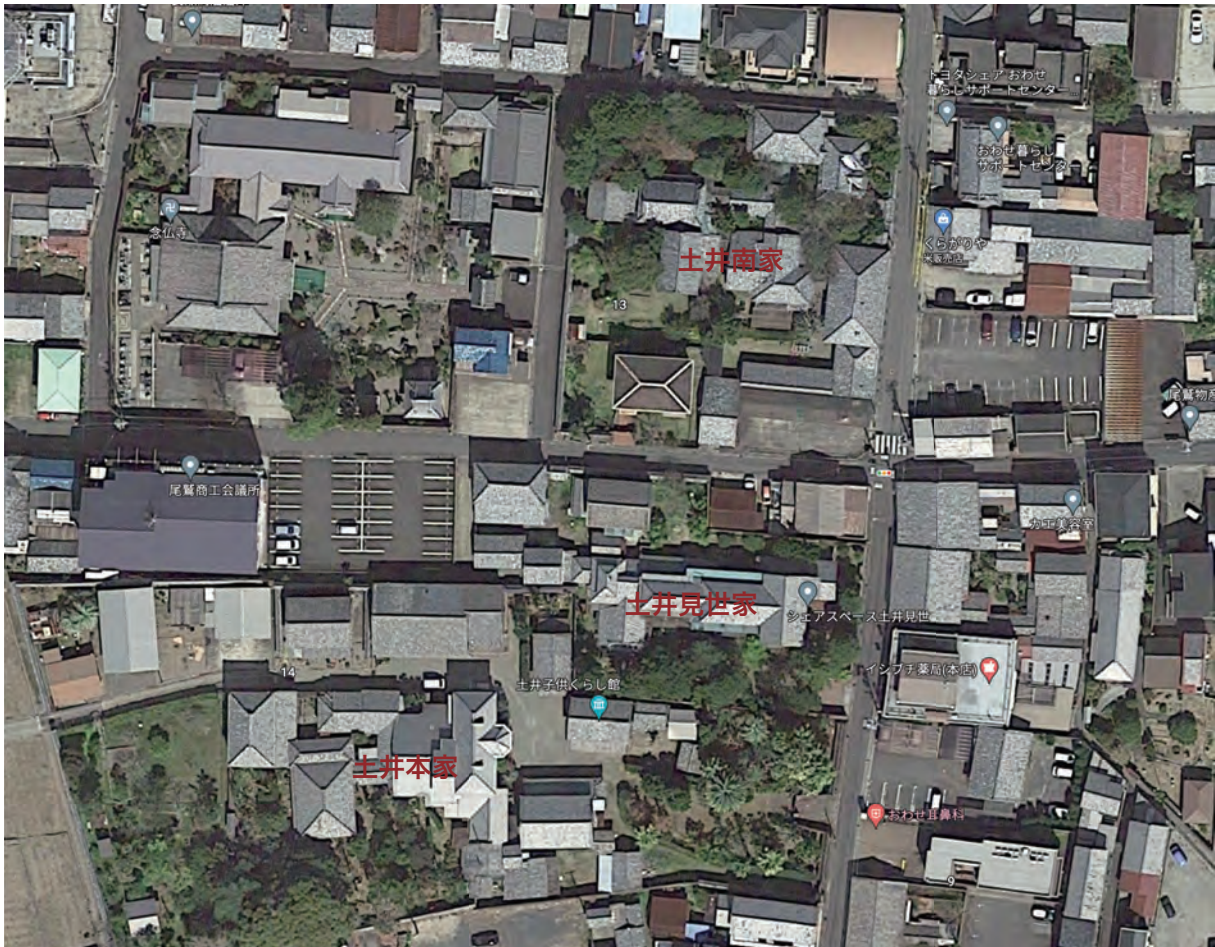


熊野古道センター

車で尾鷲市街地に戻り、予約していた「土井見世家」住宅を見学する。土井家は江戸期から続く尾鷲の山林経営の名家で、今も「土井本家」、「土井見世家」、「土井南家」の広大な屋敷が市街地に並ぶ。「土井見世家」住宅は昭和6年竣工、清水組所属の建築家安藤喜八郎設計でアール・デコの洋風意匠と数寄屋座敷の融合という大山林経営家の暮らしぶりを今に伝える建物だ。名古屋在住の現在の当主の思いもあり、「NPO法人おわせ暮らしサポートセンター」との協働によりシェアオフィス&コワーキングスペースとしての活用が始まっている。地域起こし協力隊として、住宅に居住しながら活用に関わり、傍ら大学院生として尾鷲の漁村研究にも関わるメンバーと研究者もちょうど案内にやってきてくれて、いろいろ話を聞く。仕事場と住居、複数の倉もある大きな住居で、その維持管理の大変さも実感する。その後、宿近くの高台にある民家改装のカフェ天満荘をたずねるが、残念ながら休館中であった。



土井見世家の住宅玄関



土井見世家・土井本家・土井南家の住居が並ぶ尾鷲市街地

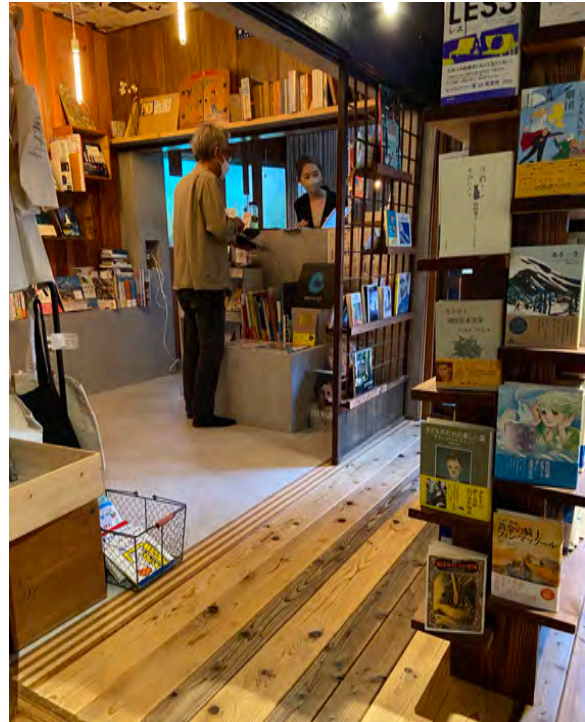
昼食後の予定は尾鷲での漁村集落の見学だったが、予定していた須賀利を変更して、「土井見世家」でも紹介してくれたリアス式海岸の奥に息づく九鬼の漁村集落を訪ねることにする。尾鷲の市街地から車で15分ほどだが、国道から分かれた道には長いトンネルがあり、抜けると奥深い地形の湾内は波も静かで、海沿い道路にはガードレールもなく、別世界に来たような佇まいがある。九鬼神社の深い緑の横に漁協の水揚げ場と集落の中心市街地が伸びる。沿いの戦国時代に九鬼水軍の根拠地となっていた地であり、現代でもブリの大敷網漁で知られた集落は特別な場を感じさせる。集落内の石畳の階段や石の水溜めを超え登った高台に木造小学校（現在は廃校）がある。別の集落内の道を登った路地に民家を改造したトンガ坂文庫という若い女性が営む何とも不思議な書店がある。緑に囲まれた深い静かな湾、集落の佇まい、路地の書店、いずれも別世界感を感じさせる場所であった。



湾と漁協魚市場



九鬼の集落の家並みと旧小学校校舎



トンガ坂文庫

台風の影響が次第に強くなりそうで、尾鷲地域で人気の清流銚子川は諦め、安全なうちに帰ろうということで、1時間ほど早めて鳥羽まで戻った。予定より早く、4時過ぎの電車で、それぞれ名古屋、大阪に戻り解散するスケジュールとなった。

4. 終わりに

コロナ禍によりしばらく中断していた JUD 中部ブロックによる、約2年ぶりの「環境デザインセミナー」ツアー企画で、当初7月30日、31日を予定したが、コロナの感染爆発で9月17日、18日に変更。コロナは少しおさまっていたが、台風14号の接近で、途中天候を心配することもあったが何とか無事開催することができた。紀伊半島の島嶼、半島、いずれもの場も環境として魅力的で、人々との懇談は楽しく、大変興味深く、充実した環境デザインセミナーとなった。従来のセミナーではなかった1泊2日のツアーであったが、全体として中身が濃く、環境デザインセミナー2回分のような濃密な時間を過ごすことができた。特に、菅島滞在は、島での伸びやかな暮らしぶり、「菅島の未来を考える会」の活動に惹かれるものがあり、ぜひまた再訪したいというのが参加メンバー全員の一致した思いとなった。